

K-69

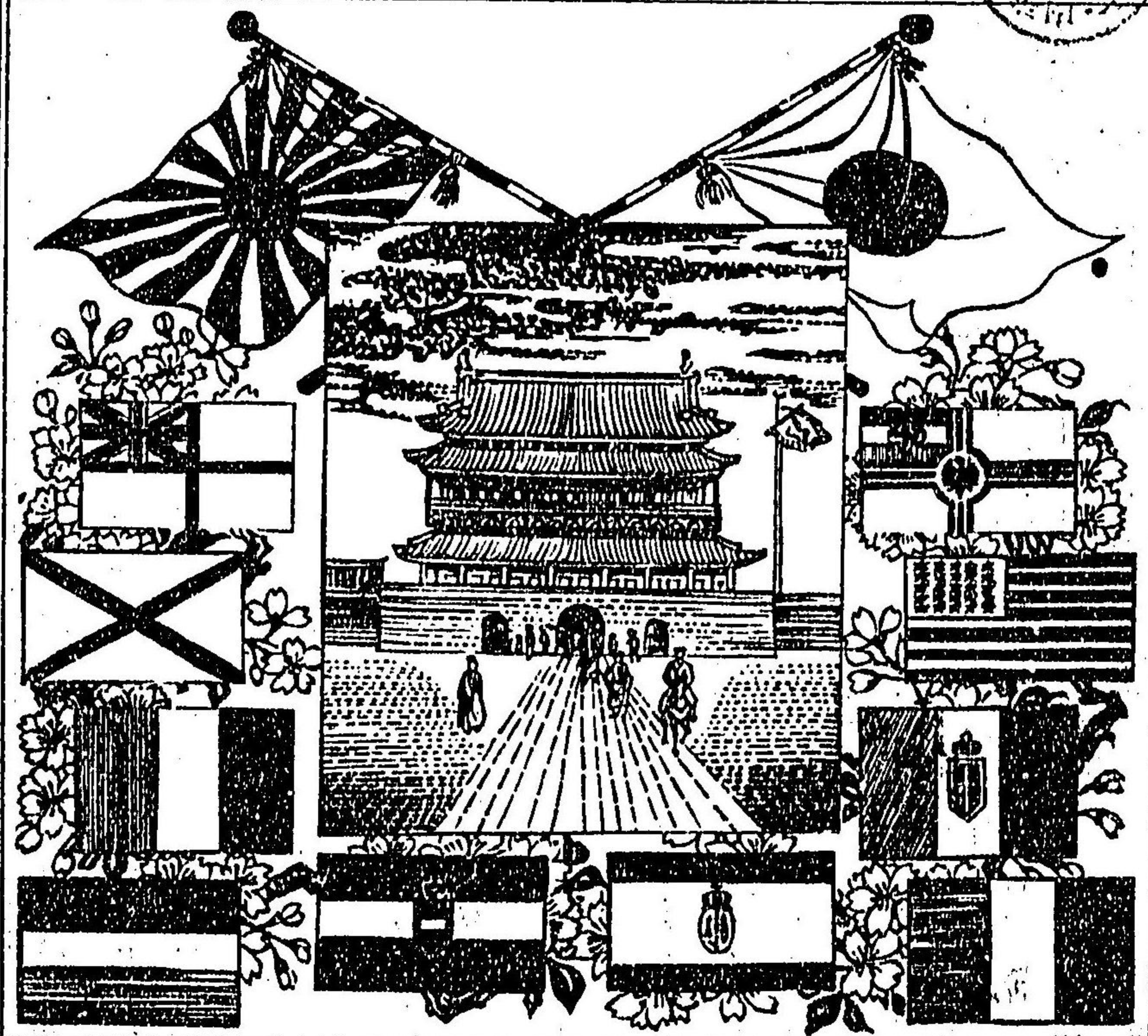
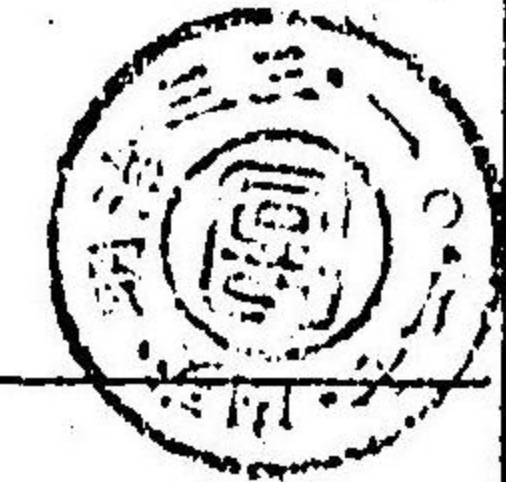
每 月 二 日 發 行

218
9
169

列 國 聯 合 支 那 戰 爭 記

世 界 未 曾 有 之 破 天 荒

第 七 編

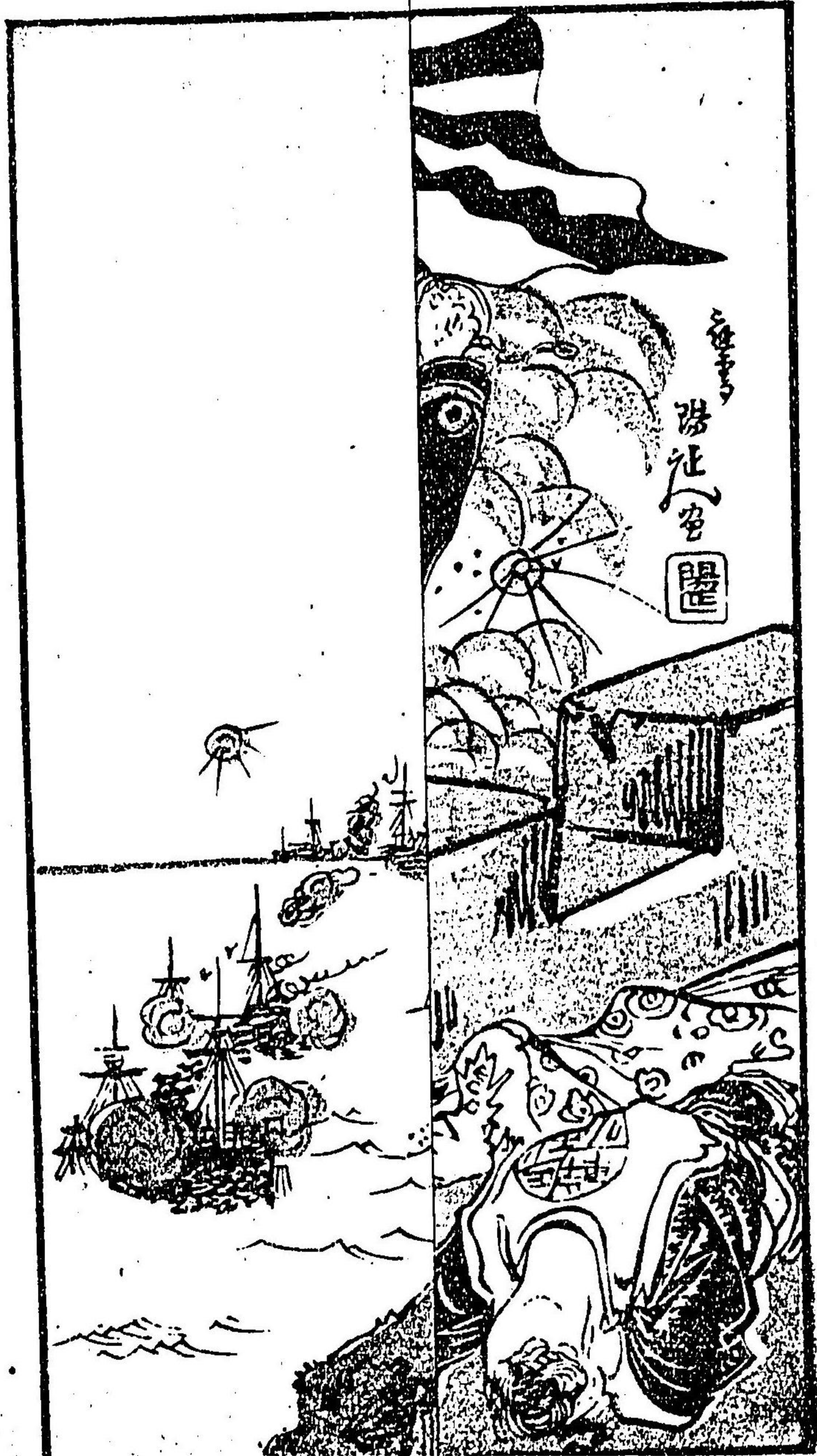


(北 京 城 頭 旭 旗 翻)

本編には北京の總攻撃を詳載す

彼等が如何に高義苦忠の動作を爲せしかを知れ

口繪
本版には大沽砲臺占領圖、寫眞銅版には聯合軍將校士卒、北京皇居其他數葉



陽社(支) 陽

列國支那戰爭記

第七編目次

口繪

本版彫刻は持田陽延の筆に成る大活砲臺占領
圖○寫眞銅版に戰地攝影に係る聯合軍將校士
卒○聯合軍の進入し、北京崇文東便門の遠
望○我兵突貫して北倉の敵を追ふ○北京皇后
○同正陽門

戰記

本誌の表紙畫に豫期し、如く日立旗第一に北
京城頭に乗へる○北京攻城前記○聯合軍の軍
艦○北清軍の狀勢○兵 運輸の狀況○北京の
占領○北京城の攻撃部署真○銅旗圖の先發○

十四日の進撃○暗花爆轟の命令○三大隊の突
貫○師團小隊の入城○北京龍城日録○北京龍
城中の外交文書

彙報

事變の終局容易に非ず○露國の提議○日本は
撤兵せず○列國協商破綻の端緒○天津附近の
偵察戰○外兵の憤 清兵の亂暴○北京總攻撃
之露軍○食物の欠乏○居留人の惘惘と教民の
慘狀○外國婦人の勇氣○進軍中の美人○倫敦
タイムズの社論○清廷御前會議顛末○支那人
の不忠不義

小説

金鶏動(一)

支那戰爭記定價表
毎月二回發兌
一冊 前金 八 錢
十冊 前金 七十五 錢
十五冊 前金 壹圓十 錢
三十冊 前金 貳 圓
本誌は前金に非れば發
送致さず郵税爲替の向
け所は本郷郵便局宛

郵一付二冊一税郵
料皆廣札爭戰那支

普通廣告前金)
半頁五號活字三十一七百廿字(金七圓
一頁(五號六十行千四百四十字)(金十二圓
特別廣告前金)
表紙の裏 甲三十圓乙廿四圓其他丙二十圓
但回数割引あり又本版等は實費を請求す
總へて本社への照會は往復はかきに限る

詞華

入清僞惑 日東逸士 ○偶成川東洋詞兄
柏木城谷 ○偶成公署背後義勇 新愼 東
洋 ○俳句數首

雜錄

韓帝聯合軍を稿ふ○清帝の贈物○獨逸公使の
葬儀○新獨逸公使の一行○戰地に於ける服裝
の改正○在清軍隊 龍の準備○故安藤大尉の
行實○厦門の臺灣銀行支店引揚○佛國兵の上
陸○英國兵の上陸○我水兵の上陸○米國派兵
を見合す○四十三哩の軍糧○新道軍糧入費○
○後殺類の欠乏

發行所 東京市本郷區春木町 國之礎社
三月六十一番地

明治三十三年九月七日印刷 (不許複製)
明治三十三年九月十日發行
發行所 杉本勝二郎 印刷人 井上二郎
編輯人 在發行所 神田區三崎町
三一ノ一番地



○同正陽門
戰記
本誌の表紙面に豫期し、如く日軍旗一に北
京城頭に懸へる○北京攻戦前記○聯合軍の軍
議○北清軍の状況○兵 運輸の状況○北京の
占領○北京城の攻撃部署真○鍋旗國の先發○

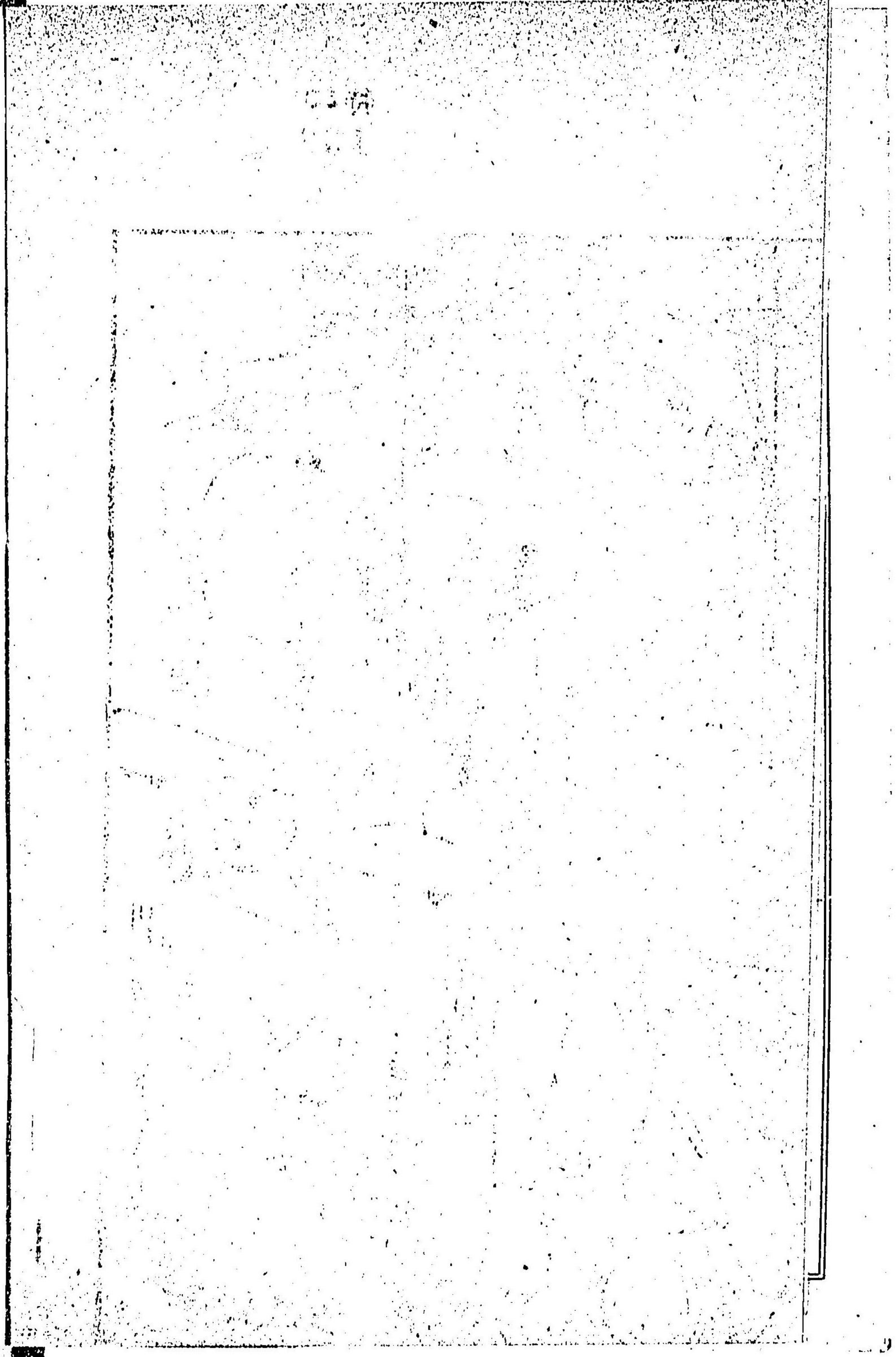
小説
金鶏動(一)
露軍○食物の欠乏○居留人の惘々教民の
慘狀○外國婦人の勇氣○進軍中の美人○倫敦
タイムスの社論○清廷御前會議顛末○支那人
の不忠不義

の改正○在清軍隊 龍の準備○故安藤大尉の
行賞○厦門の臺灣銀行支店引揚○佛國兵の上
陸○英國兵の上陸○我水兵の上陸○米國派兵
を見合す○四十三哩の軍糧○新造軍艦入雲○
○後發類の欠乏

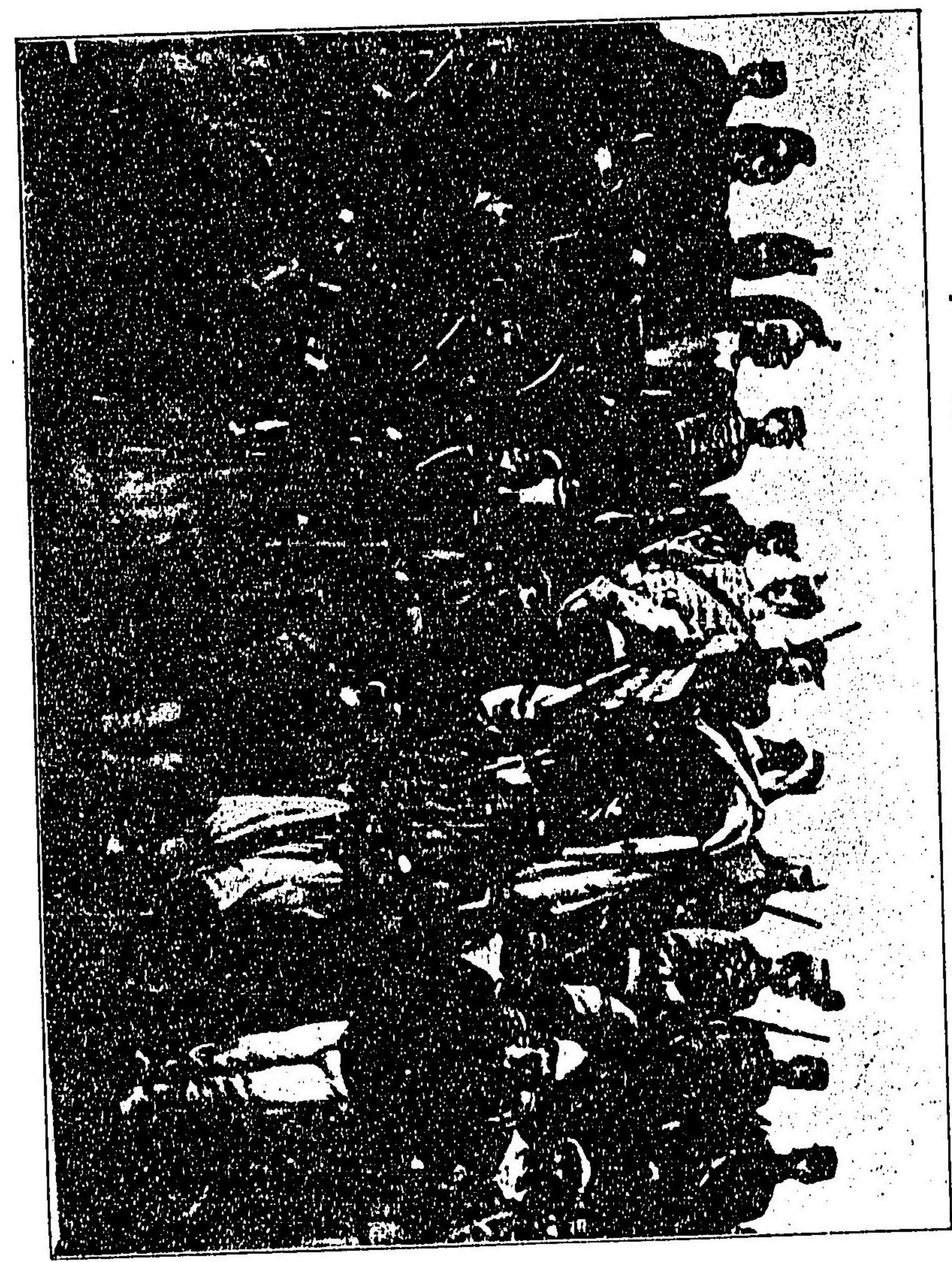
支那戰爭記定價表
毎月二回發兌
一冊 前金八錢
十冊 前金七十五錢
十五冊 前金四十五錢
三十冊 前金四十五錢
本誌は前金に非れば發 送致さず郵税爲替の向 け所は本報郵便局宛
郵税一冊一付一錢

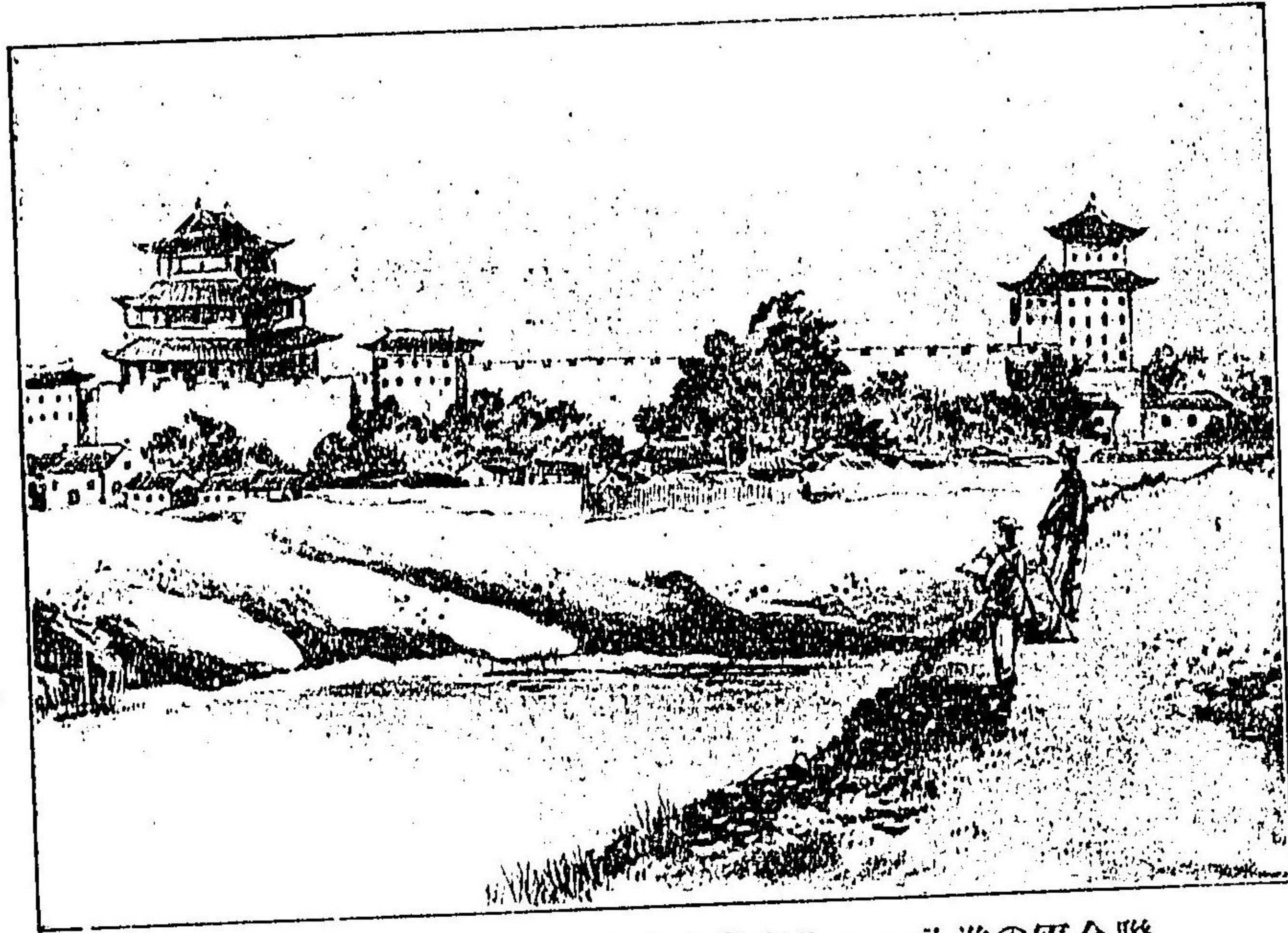
支那戰爭記廣告料
普通廣告(前金)
半頁(五號活字三十行七百廿字) 金七圓
一頁(五號活字六十行千四百四十字) 金十二圓
特別廣告(前金)
紙の裏 甲三十圓乙廿四圓其他丙二十圓
但回数割引あり又木版等は實費を請求す
總へて本社への照會は往復はかきに限る

發行所 東京市本郷區春木町
三丁目六十一番地 國之礎社
發行所 三丁目六十一番地
編輯人 杉本勝二郎 印刷人 井上三郎
在發行所 神田區三崎町
三ノ一番地

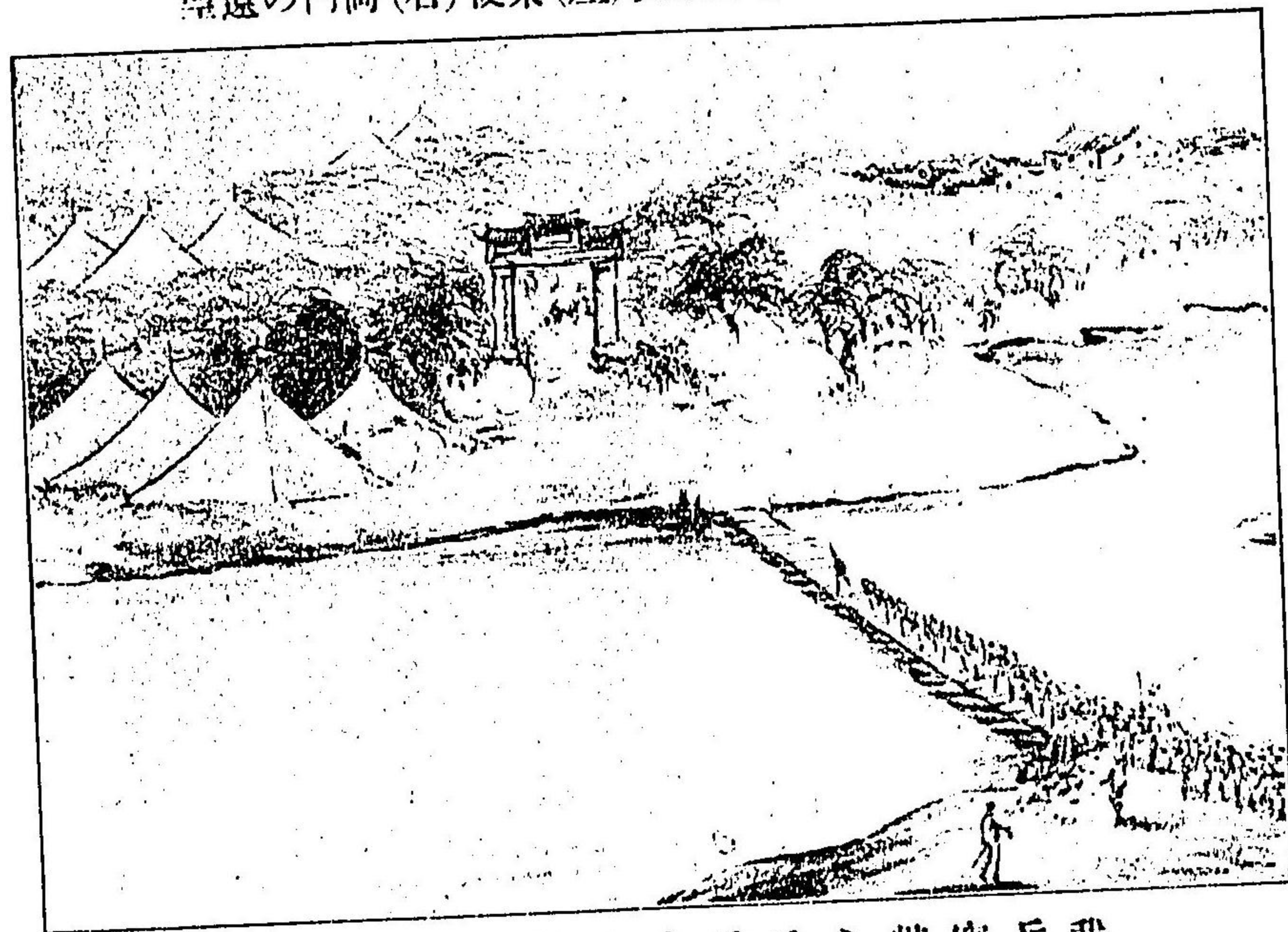


聯 合 軍 將 梭 士 卒



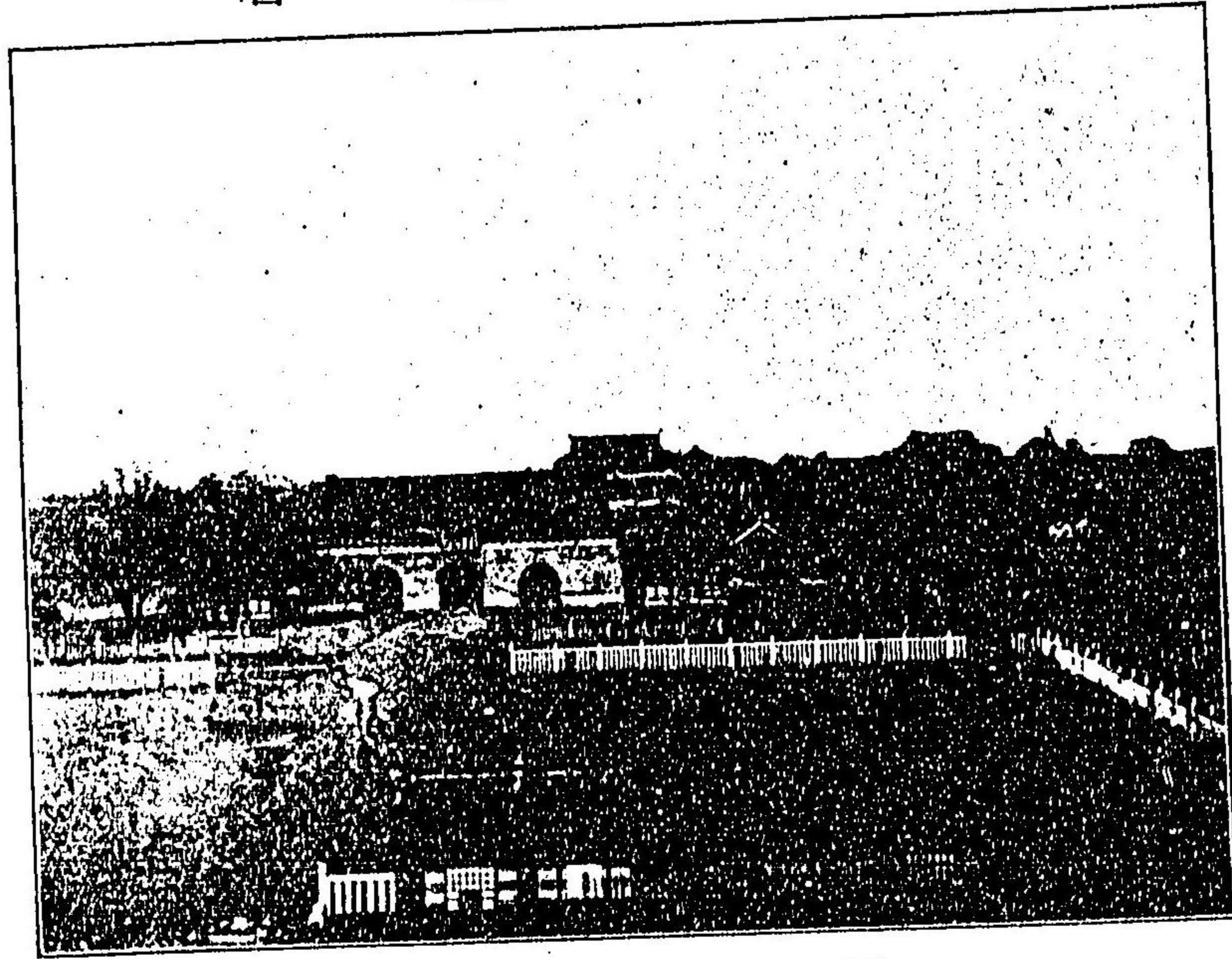


望遠の門両(右)便東(左)文崇京北ニレ入進の軍合聯

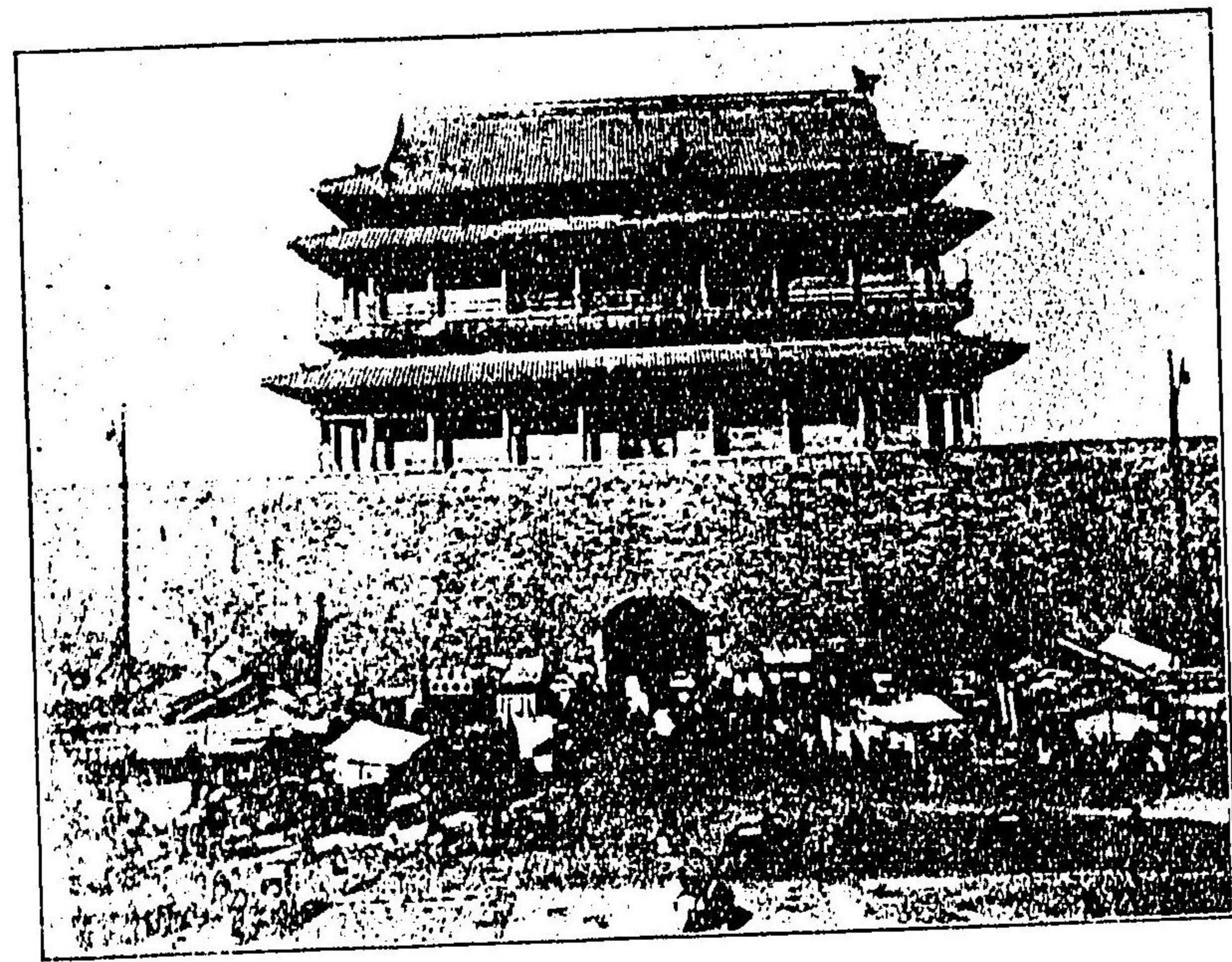


ふ追を敵の倉兵てし貫突兵我

北 京 皇 居

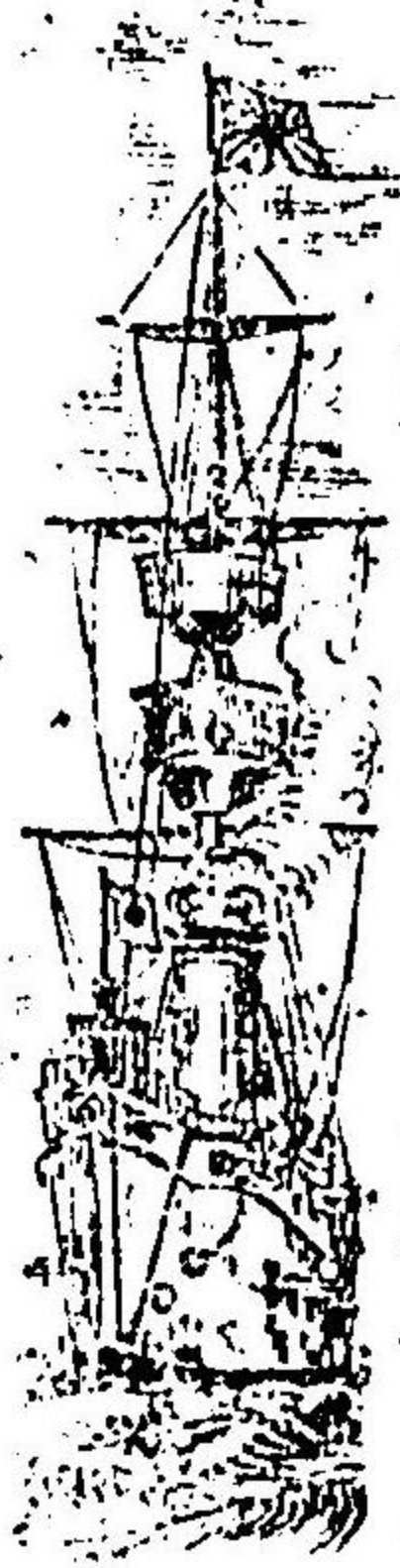


同 正 陽 門



列國支那戰爭記第七編

(九月十日發行)



戰記

本誌の表紙畫に豫期し、如く旭旗第一に北京城頭に翻る

日清戦役の際我十萬の衆は將に北京に入らむとして媾和成りしが爲果さず然るに今や聯合軍——其主力なる我二萬餘の精銳初て北京に入り旭日旗を其城頭に樹つ實に千古の快事に云ふべ

其勝報は既に公電に依りて普く世に知られしも讀者は尙其攻戰の詳細を知悉せんとして恰も大早の雲霓を望むの思ひされしならむ茲に其前後の顛末詳況を記載すべし

北京攻戰前記

聯合軍北清の情勢を一括して讀者が豫め北京總攻戰の詳報を讀むの前提となすの必要を感ず

聯合軍の軍議

非常に困難なるべく豫想せられて實際は案外に容易なりしは聯合軍の北進逆動なり天津城攻陷の後三週日間我聯合軍は敢て一兵一卒を北進せしむることなく却て敵兵をして堡壘を要地に築きて防守の策を講ずるの餘裕を得せしめたるものは聯合軍の兵力單薄なるも其原因なりき天津附近に國匪官兵出沒し時に逆襲の形勢

を示せるも亦一原因たり其他糧餉輸送の困難飲料水不足の困難天候酷熱の困難等皆聯合軍の北進を躊躇せしむる一原因たらざるはなかりき然れども北京なる列國公使の密使は屢救援の一日を緩らすべからざることを促せり天津附近の敵状も左迄憂慮するに足らざることも分明せり而して我第五師團を始め列國の後發隊も續々到着せり此上は糧餉や天候や多少の困難ありとするも是非其急速に進軍せざるべからず進軍して可成的速に公使救援の目的を達し又此戦局を終結するの道を求めざるべからず我日本を始め英米の二國は期せずして此點に於て相一致せり獨逸の如きは當初は其大軍の本國より到着するを待ちて北進せんとするの意なきにあらざりしも獨逸皇帝が其公使の被害を激怒せる一日も北進の速ならんことを

段陰謀野心ありての事にあらざりしなるへしと雖も或る一部の人々中には露國が此の如く行軍難を唱へて北京の救援を急がざるものは可成的事變の糾紛錯雜して其終局の期の永からんことを欲し而して此事變の時期を利用して爲さんと欲する所あるにあらざるなき歟を疑ふに至りたる程なり故に列國聯合軍の指揮官會議には急進説と緩進説と相牴牾し往々小田原會議の状態を呈せんとせるも期せずして急進説に一致したる日英米の三指揮官は斷乎として急進説を主張し列國指揮官に説くに若し列國軍にして北京進撃に同意する能はずとならば日英米三國のみにも進軍すべしとの旨を以てせしに因り露佛其他の諸國軍も夫程迄責任を以て進撃を主張せらるゝ以上は必ず成算もあるべければ我等も同様進撃軍に加はるべしとて遂

を望み駐屯の獨逸兵指揮官に對して列國兵若し躊躇して北進せずんば我兵のみにて北進すべしと嚴令したるより自ら日英米の北進論と相符するに至れり

斯の如く日英米獨の諸國は七月の下旬に於ては迅速に聯合軍の北進運動を希望したるに拘らず天津城陥落の前より俄に持重の態度を取れる露國は頗りに北進の容易ならざるを聲言し或は雨期進行の困難を説き或は炎天戰鬪の痛苦を論じ殊に天津附近に於ける敵兵の今にも逆襲し來らんとするが如き情報を得て聯合軍を驚かし可成的北進運動の遅延せんことを希望し而して佛國も亦露國と共に行軍難を唱へたり勿論露佛の兩軍が行軍難を唱へたるは相當の理由あり別

に北京進撃の事は日英米三國の強硬なる主張によりて聯合軍全體の同意一致を得るに至れり故に或人は説をなして曰く北京の進撃は有形的に於ても容易ならざるが如くなり然れども無形上に於て更に容易ならざる事情存したりしなりと蓋し適中の言なり

北清軍の狀勢

七月三十日丁字沽に於て實行したる威力偵察によりて前方に於ける敵軍の勢力も略推知するを得て大體に於て決定せる北進運動は愈活動の機を得或る國の事情によりて一二日の時日を猶豫せしむる最早躊躇して時機を失ふべきにあらす八月四日聯合軍は一齊に北進の途に就き五日北倉の敵と激戦して之を破り六日揚村の敵を追て之を走らし七日南察村を占領して敵軍が頼りて之て我軍を防

禦せんとせるの地點案外容易に我手に落ちたり

初め聯合軍の北進するや楊村附近の敵情審ならず其

強弱も測知し易からざるを以て北倉楊村を占領する上

は前路の敵情如何により或は急速に前進するか將た一

時同地方に留り天津との連絡を鞏固にし糧食輜重の完

備を待ちて然る後前進するかは未定なりしのみならず

聯合軍の多數は概ね楊村占領を一段

落として暫時の休養を得べきを期したり然るに楊

村以北敵軍風を望みて潰散するの状あるを以て此の勢

に乗じて前進せば一擧北京城下に押

寄するを得べきを以て南蔡村占領の後列國指揮官は

會議を開きて前進運動を繼續するに決し其計

畫を左の如く定めたり

聯合軍中日英米露の四國兵は明八日楊村

出發、南蔡村に一泊、九日河西務、十日張家灣、十一

日馬頭、十二日通州に到らんと期す

佛國兵は輜重不足の爲め暫時楊村に留りて同地方の守

備に任すべし

澳太利、伊太利兩國兵は天津に歸營して其守備に任せ

しむ

北進軍の本隊は白河の右岸に沿ひて行進し

牽制隊は白河の左岸に沿うて行進すべし但し牽制隊

は一大隊とし日、露兩國より隔日交代を以て之れに任

す

行軍の序列は日、露、英、米とす、歩兵及び砲兵に毎日

午前四時出發騎兵は同三時三十分出發と定む

北進軍河西務に達したる上は四國の騎兵は道を分ちて

北京に向ひ其西南部に出で、北京より逃走する敵兵を

牽制するを務むべし其聯合騎兵の指揮官は日本軍の騎兵聯隊長とす

官は日本軍の騎兵聯隊長とす

の抵抗をも受けず此地に入ることを得たり

八月九日 聯合軍の本隊河西務を占領す

日本騎兵、露のユサツク兵各一名宛負傷す、占領

後搜索の結果によれば董福祥は河西務に出陣し居

たりと云ふ

八月十日 聯合軍張家灣を占領す

八月十一日 聯合軍馬頭を占領す

八月十二日 聯合軍は何等の抵抗をも受くることな

く早朝通州を占領せり

日本軍は米穀六萬石を貯蓄せる倉庫を占領し爲に

大に糧餉の不足を補ふを得たり

到國指揮官會議を開き十三、十四兩日兵士を休養

し十五日北京城總攻撃を爲すに決す

以上は是れ聯合軍が前進の概略にして楊村以北殆んど

戰鬪と云ふべき戰鬪なく破竹の勢を以

て

八月八日 聯合軍の本隊南蔡村に入る

同村は前七日我眞鍋少將の率うる歩兵二大隊騎兵

一中隊、山砲二中隊、野砲一中隊を以て占領し北

京附近敵情偵察の立脚地となし船舶の微發物資微

辨の便を謀らんとせる地にして聯合軍の本隊は何

程を記せば在の如し

是より先北倉占領の時各國出兵の數は日本八千、英

二千、米千九百、露三千二百、佛八百、獨二百、澳伊

若干、合計一萬六千五百内外なりしが右の作戰計畫に

より佛、澳、獨、伊は前進に加はらず日、英、米、露

の四國兵中にも負傷者の後送せられしもの鮮からずし

て其兵數減せしも後發の部隊亦代りて之に加はる者あ

り我日本軍のみにも一萬餘他も亦之に準じて増加し

たれば聯合軍の前進隊は約二萬の兵數なり而して

此前進軍は果して其豫期せし通りに進行せり今其日

て長驅したれるは實に迅雷を掩はざるの状あり海に列國國民の驚嘆する所なるべし勿論聯合軍が其前進の急速なるが爲輜重糧が不足糧餉乏し炎天に苦み悪水に苦みたるの状は筆紙の能く盡す所にあらずと雖も只幸なりしは本年は此の雨期に際し降雨も頻繁なれども炎威赫々乾燥の度も強きにや各地とも雨水の溜正して沼澤をなせる所少く爲に行軍は豫定よりも容易なりし一事なり而も或人は曰く前進の斯く迅速なりしは是れ行軍序列を日、露、英、米となし我規律厳正にして突進の勇ある **日本兵毎日其先登**に立ちたるが爲ならざるを知らんやと蓋し或は然らん

兵站運輸の状況

聯合軍の北進に對しては **日本軍は其最多數の兵力を以て常に作戰**

計畫の發議者たり、實行者たり、從て日本軍の名譽は最も大なると共に日本軍の責任も亦最も重し **山口師團長**が輜重縱列の**完整を待たず糧餉飲水の缺乏を意とせず迅速に前進運動を起し**自餘の列國も亦其後方部隊の完否如何を云々する能はず務めて我軍の前進運動に倣はざるを得ざるに至らしめしものは其行爲海に**大膽不敵**なりと云ふへし日清戰役中平壤の包圍攻撃は實に野津師團長の大膽不敵なる作戰法によりて成功し北京城の攻撃も亦山口師團長の大膽不敵なる作戰法によりて成功したり楊村より通州に至る里程十七八里五日を以て前進し携帶の行糧敵地の糧秣用ひ盡して尙は足らず前進の途中より天津なる兵站監部に向つて米と鹽とのみ至急送れの電報を發せりと云ふ行軍の困難想見

するに堪へたり而して斯の如く行軍の困難にして糧餉に不足を感せる所以のものは後方勤務の整理せざるが爲にわらずして行軍の進行後方勤務の整理を待たざるを以て也當時天津に第五師團兵站監部あり秋山騎兵大佐、兵站監として兵站全部の指揮に任じ前進軍の占領せる要地には直ちに兵站司令部を設置して兵站線の聯絡を取り目下設置せられたる兵站司令部は左の如し

西大沽兵站司令部 大沽河口船廠の横にあり大沽沖にて小汽船に積み換へたる貨物人馬等は一先此處に上陸し然る後汽船便、鐵道便、陸路等各便宜によりて輸送す是れ此の地に運輸通信支部と兵站司令部との併置しある所以なり

天津兵站司令部 天津は北進軍に對して一切の糧餉を供給すべき兵站基地とも云ふべく兵站監部ありて全般の兵站事務を處辨する外兵站司令部ありて一切

の雜務を處辨せり

北倉兵站司令部 北倉占領の後之を設置す
楊村兵站司令部 六日楊村占領後之を設置す
河西務兵站司令部 八日河西務占領の後之を設置す
馬頭兵站司令部 十日馬頭占領の後直ちに設置せり
通州兵站司令部 通州占領の情報ありて後同地に設置すべき兵站部員は直ちに天津を出發せり又通州には兵站監より天津郵便局に交渉あり同地に郵便局出張所を設くる筈にて局員三名十六日出發したり
右の兵站線は陸路にても聯絡し居れりと雖も可成的白河(北運河)の水運を利用し以て糧秣馬匹等を輸送し居れり、其水路輸送の指揮に任ずるものは**海軍陸戰隊**にして指揮官福井中佐(正義)野崎大尉(小十郎)等は水路利用の便宜上今尙白河河岸なる三井洋行

の一部に合意し船舶操縦の任務に當れり
 其船舶は從來白河を往復上下せし支那ジャンクにして
 天津陷落の際戦利せるもの及び爾後雇入れ買入れたる
 ものを合して大小百五十餘隻、八日聯合軍楊村を出發
 せるの後續を發遣し五日間に於て殆んど一隻をも剩さ
 ざるに至りしが其と同時に先發せる船舶の目的地に達
 して歸航せるものありて尙絶す人馬糧秣を輸送し居れ
 り、其船舶には一名若くは二名の海軍水兵乗租み居り
 支那の船頭を役して之を運轉するが故船舶操縦の事も
 甚だ敏活にして其方法最も當を得たるが如し

通州にて我占領に歸せし米
 庫には六萬餘石の米穀貯蓄せられ居た
 るが故糧に乏に藉るの難法にて此の米穀を利用せば兵
 站部より輸送するものは當分米穀を廢し代ふるに副食
 物を以てするを得るが故に先發部隊も今後は左迄糧餉

の不足に苦しむことなかるべし
 輸送上に就て何人も先づ感ずるは破壊せる鐵道を修理
 して之を利用するの一事なり日露兩國は始めより此の
 鐵道修理の必要を豫見し各自其鐵道隊を發遣し現に

我鐵道隊は吉見中佐(精)引率して天津に駐在
 し居れるが北倉占領の後露國は先づ天
津以北の鐵道修理に従事し而して我
 軍に交渉し來りて曰く楊村以南我能く之を修理せん楊
 村以北貴軍能く修理の任に當らんや否やと我司令官之
 を辭拒して、貴軍既に楊村以南の鐵道を修理する以上
 は請ふ幸に楊村以北の鐵道をも修理せよ我鐵道隊兵員
 尙少困難の箇所のみを修理するの任に堪へざるなりと
 故に今日の處鐵道修理の事は露國の專任に歸したるが
 如く露國は銳意之に従事し去月二十日迄には楊村迄を
 修理し了るべしと聲言し又烏蘇里地方にありし鐵道隊

八百名は遠からず烏港より當地方に轉輸せられ鐵道
 の修理に従事すべく從つて其工程も迅速なるを得べし
 と聲言し居れり兎に角鐵道修理の一事は露國の最も熱
 心せる所にして塘沽より天津迄の線路は露國の手にて
 之を管理し又塘沽より以東蘆臺迄の間も既に露國の手
 にて修理を了へ而して蘆臺以東十七里の間を修理した
 れば他には破壊の箇所なきを以て山海關迄列車を通ず
 るを得べく而して山海關外の鐵道も既に牛莊に至る迄
 の工事を終へ居る由なれば露國は同線路破壊の箇所
 も手を入れ其占領せる營口を基點として關内外鐵道を
 占領管理し以て**滿州方面と當方面**
の間に一氣聯絡の運動を爲さん
 とするにあらざるなきかと云ふものあり

停車場及其船舶橋梁等は戦はずして露兵の手に落ち露
 兵は今後兵站輸送上に就て最も緊要の地點を占有する
 に至れるを觀ても露國の注意する所を察知し得べし之
 を要するに今回の事變冬季前に落着終局を見んとせば
 可なるも若し其終局を見る能はずとせば冬季結氷中連
 輸通信の便は一に北京天津間及天津山海關の鐵道を利
 用し鞏王島を海口として陸運海運の連絡を取るの外な
 き也而して此の時に於て同鐵道の管理權は一切露國の
 手に歸し其使用の可否は一に露國の命の儘に任せざる
 を得ずとせば列國は特に不便不利を蒙るべし我日本の
 如きも此の點に就ては三省三思して便宜の策を講せざ
 るを得ざる也

本月六日楊村の役の如きも露兵と英米兩國兵とは各先
 を争うて先登し米英兩國兵先づ楊村を占領せるも楊村



北京の占領

聯合軍は十三日通州占領後は一旦兵を休養し準備を整へて北京大攻撃に着手するの計畫なりしが急に方略一變して俄に急進することとなり蓋し八月八日聯合軍が南蔡村（楊村を距る二三里許）に達したる頃北京なる我公使館の柴中佐より福島少將に送りたる密使に出會せり其密使の齎したる書面にては獨逸公使の外各國公使以下皆無事なるも清官等が食糧を贈つた杯と云ふことは悉く虚言なり今や糧食全く欠乏し敵の攻撃は日一日と劇烈を加へて其窮情甚しければ一日片時も速く救援軍の來るを望む云々事情を詳細に認めありて一日も行進を援める能はざるを以て我軍より各國軍に北京の危殆に切迫したる事情を通告し方略を一變して北京に急進するの意見を

提出して同意を求めたり各國も皆驚きて多數は速に同意したるを以て福島少將は直ちに返書を裁し其密使に托して還送したり其全文左の如し

八月八日發信南蔡村北廿四キロの礮廠に於て日本及聯合各國軍は八月五日北倉附近の敵を擊攘し同六日楊村を占領せり而して日、英、米、俄の聯合軍は本日楊村を發し北進の途中午後八時廿分南蔡村に於て貴書に接し北京の情況を審かにし衆皆公使以下の恙なきを慶し併せて一日も早く我聯合軍の北京に到達し公使以下貴官等を其苦境中より救出せんことを期し師團長以下衆心奮激す、聯合軍は意外の故障あるにあらざれば九日河西務、十日馬頭、十一日張家灣、十二日通州に至る豫定にて其北京城下に進出するは蓋し十三四日の兩日ならん

福島少將

榮兵中砲佐戰

此返簡は越えて十日の午後四時公使館に到達す當時人々の歡喜の狀は亦格別にして中には歡極りて泣く者ありしと左もあるべしと察せらる

斯る切迫の事情に因り聯合軍は急に歩を早めて前進したり今や後送輸送を顧みる暇もなく只管人馬の息の續かん限り敵を驅逐しつゝ猛進せり是か爲に糧秣共に全く欠乏して人は泥水と共に糲を嚼み道傍の瓜唐黍を食ひ馬には南京米と高粱とを與へて僅に一時の飢餓を凌ぎ百三三十度の焼くが如き熱を浴びて七八里の道程を一足飛びに急走したるを以て續々痲病と脚氣を發したる者夥多なり彈藥糧食の縦列も亦斯く俄に急進せる軍隊を逐ひて走る故に此方にも人馬の損害は非常なれども戰略を專一にしたる聯合軍は無頓着に猛進し豫定の如く十二日通州を占領し

て直ちに翌十三日北京に向け進發したり

北京城の攻撃部署

師團命令

八月十二日午後十時五分

通州第五師團司令部に於て

- 一 北京の敵兵は約十營に過ぎざるもの、如し
- 二 師團は聯合各國軍と共に北京攻撃を實行せんとす之が爲先づ別紙制の獨立騎兵及び枝隊を先發せしむ
- 三 獨立騎兵及先發枝隊は明十三日午前六時通州西門を出發し八里橋、首家庄を経て定福庄附近に至り定福庄、梧連坡を連ねたる戰場に宿營し北京の敵狀を搜索し師團の集合を掩護すべし日本軍の南方には露軍、又其南方には米英軍の順序を以て連絡

運動を爲す筈なり。

四 歩兵第九旅團より出したる當地の守備兵は出發前

歩兵第二十一旅團より交代せしむべし

五 大行李は明日分配終れば菅家庄に至り第一糧食縱

列より補充を受け枝隊の宿營地に至り宿營すべし

六 彈藥の定數に充たざるものは本夜中に補充を受く

べし

七 余は明日通州に在り

第五師團長陸軍中將男爵山口素臣

(別紙編制)

獨立騎兵 騎兵第五聯隊(一小隊缺)

露軍の騎兵を指揮するものとす

先發枝隊

枝隊長眞鍋少將

歩兵第九旅團各地の守備隊を缺)

隊、露國一中隊、英米兩國兵各百人は通州の守備

に任じ歩兵少佐佐本壽人の指揮に屬す

五 歩兵第二十一旅團司令部(塚本少將)、歩兵第二十

一聯隊(第三大隊缺並に二中隊及後方守備隊を缺

く)は右縱隊となり午前四時通州北門を出發し大

和店新庄を経て前進し左縱隊に連絡すべし

六 左縱隊は左の順序を以て午前四時三十分西門を出

發し八里橋定福庄を経て先發枝隊に追及す

師團司令部

歩兵第四十二聯隊(後方守備隊を欠く)

工兵第五大隊(後方殘留部隊を欠く)

衛生隊半部

但歩兵第四十三聯隊より一大隊の前衛を出すべ

七 大行李は諸隊出發後西門外に集合し午前六時出發

騎兵一小隊

野戰砲兵第十六聯隊第一大隊

工兵第五大隊の一中隊

衛生隊半部

他の諸隊は通州に一泊休養す

右の命令に基き更に翌十三日**第二の命令**ありたり

八月十三日午後九時

通州第五師團司令部に於て

一 北京東面の城壁には若干の砲を備ふるを見る

東面城壁外は小斥候の外敵兵を見ず

二 獨立騎兵及先發枝隊は本日定福庄附近に宿營し明日尙前進する等

三 師團は明日北京に向ひ前進せんとす

四 歩兵第二十一聯隊の一大隊(二中隊缺)、工兵一小

隊

左縱隊に跟隨すべし

八 歩兵彈藥一小隊、山砲彈藥一縱列、臨時野砲一縱

列、第二野戰病院、第一糧食縱列の半部、第三糧

食縱列は輜重隊大隊長神谷少佐の指揮を以て午前

六時三十分西門出發大行李に跟隨すべし

殘餘の輜重は彈藥大隊長栗原少佐の指揮を以て午

前七時三十分西門出發八里橋菅家庄を経て定福庄

に至らば停止すべし

九 余は左縱隊本隊の先頭に在り

第五師團長陸軍中將男爵 山口素臣

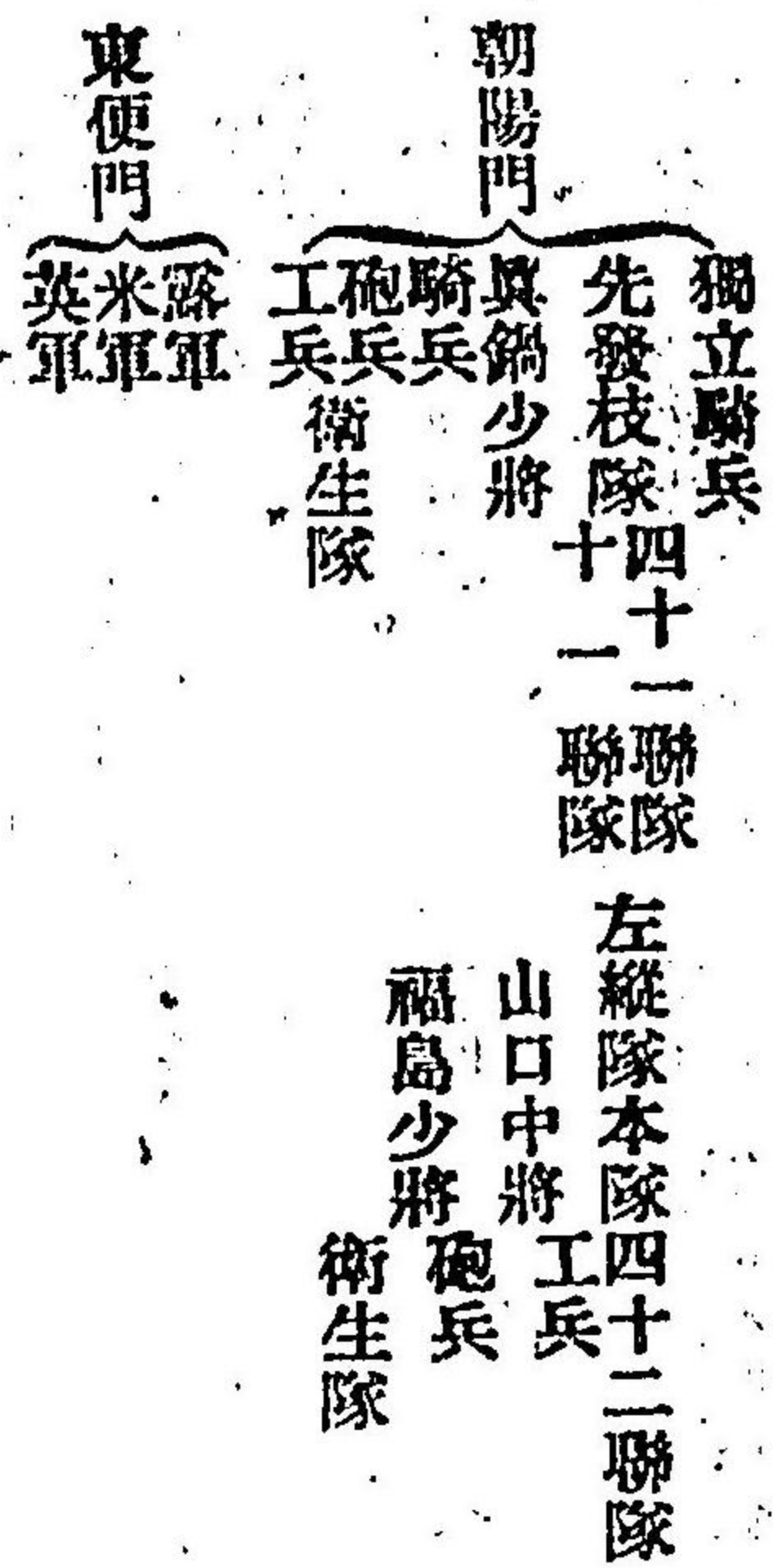
此命令に據れば**北京城に向ふ軍隊**

の列序は左表の如し

東直門

右縱隊第二十一聯隊

塚本少將



真鍋旅團の先發

真鍋旅團は通州陥落の翌日即ち本月十三日午前六時第十一聯隊を前衛とし同日十時頃大王庄に若し尙ほ其聯隊より數多の將校斥候を放ちたるに北京城壁に近く進み及んで敵の狙撃を受け即死したるものあり城内にては義和團匪の太鼓を叩きなとして兵威を示すものあり

戦闘開始

前進の命令

此時第四十一聯隊も前衛に次で前進し同聯隊には真鍋旅團長、福嶋少將と共に在りしが十四日午前二時半頃に至り旅團長より第九旅團に對し何時にても直に前進し得る様準備し置くべき旨を命せり暫くして此時通州に在りし山口師團長より騎兵本隊は北京の西方及び北西方に運動を起し又第九旅團は團師長の到着に先んじ必要に應じ、北京に入るべしとの命令ありたり

十四日の進撃

斯る事情にて豫定の時間を繰上げ午前四時四十五分大王庄を發し今度は第四十一聯隊を前衛と爲し第十一聯隊は前衛本隊となり兵氣肅々として朝陽門に向ひたり曉色は此日の快晴を示して陣中の光景は又一層の偉觀を呈せり又第二十一旅團は師團司令

此夜十一時頃英露米聯合軍の向ひたる東便門の方に當り突然猛烈なる銃聲聞えたり依て直に斥候を出したるに一隊の露軍は敵と交戦しつゝあるを確めたり露軍の崩解する所によれば是れ敢て北京の本攻撃にあらず只有力なる斥候を出したるのみとの事なり蓋し露軍は北京も亦通州の如く容易に陥落すべしと想像し且つ偵察を行ひたる結果東便門には敵兵少なく直に之を破るを得べしと信じたるもの、如し然るに兼て聯合軍將校會議にては北京攻撃は十五日朝開始の旨議決し置きたるに今や露軍は既に有力なる斥候を出したる以上は我も之れと均衡を保つべき方法を取らざるを得ざるに至れり

部と共に十四日午前三時半通州を發し途中休憩の違もなく勇を鼓して前進し第四十二聯隊は師團の本隊となりて朝陽門外千二百メートルの地に陣し第二十一聯隊は夫れより右折して東直門に向ひぬ

城壁に迫る

第九旅團の前衛たる第四十一聯隊は朝陽門外に於ける紅橋と稱する石橋に達したるは午前六時十分頃なりし當時騎兵の偵察に依れば敵は城門より城壁に沿うて防禦線を張れりとの事なりしかば同聯隊は一方には砲兵陣地を布き更に前進したるに敵は城壁に據りて猛烈なる射撃を開始したり依て我兵は道を挟みたる兩側の人家を掩屏と爲しつゝ城門に近く迫りしが見上ぐれば城壁高く空中に聳へ之に攀ち登らん事思ひも依らず殊に城門の裝置堅固にして其正面には城壁あり城門の前に

行進せし軍隊の後を射撃せらるゝの危険あれば若し城門容易に破れざらんには門外に競ひ集まられる兵士は恰も井中に陥りて上より射撃せらるゝと一般にして敵は所謂一夫關に當れば萬卒之を過ぐるを得ざるの要害に據りたるものなり

朝陽門破れず

斯くて第四十一聯隊の朝陽門外に着するや尖兵として矢崎少尉は第一中隊の一小隊、南山大尉は第十中隊を率ゐて城門に進めども入る能はず佐伯少佐前衛大隊を率ゐる兵前衛として爆薬の装置に着手したるも敵は盛んに周囲より射撃し銃丸霰の如く我軍の死傷少なからず我將校士卒の動作は頗る勇敢なれども工兵が爆薬の装置に従事する間に交々死傷者に

敵頑固に抵抗す

敵は少なからざる砲門を有するが如くなりしも砲丸に欠乏を感じたるものと見え甚だしく應戦すること能はざりしも尙多少の發砲を爲したるが幸に格別の損害を與へざりし此際朝鮮時報記者某頭部に負傷せり

兵は朝陽門の北と其南なる砲

敵の砲兵陣地を盛んに砲撃せしに城壁上の敵は砲撃中は隠れ砲聲熄むときは顯はれ城門を破らんとする我兵に對し頑固なる抵抗を爲せり左れば最先きに進みし南山大尉も矢崎少尉も敵の瞰射の許にありて容易に引揚ぐるを得ざりしが斯くては我砲聲は味方を傷つくるの懸念ある故に午前十一時漸次退却したり

夫より直に城門に向ひて砲撃すれども城門の構は巴字形を爲し城壁にて掩はるゝが故に砲撃も其効なかりし

を生じ如何に焦慮するも其装置を完ふする能はず

此に於て山口師團長は砲兵隊に命を下して城壁上の敵を撃たしめたり我砲兵陣地は朝陽門外約千五百メートルの高臺にあり

永田大佐之を指揮し九時四十分砲撃を始む十八門の野砲と三十六門の山砲

とは間斷なく一齊に發射せられ砲煙は濛々漠々天日を蔽ひ其砲聲は殷々轟々天地

を震撼し壯快言はん方なく殆ど坤軸も碎けんかと怪し

まるゝ斗り其妻まよき光景は喩ふるに物なむ

かは工兵の力を以て之を破壊せんとすれども我兵が民家の隣より出で、道を横断すれば敵丸雨下し又如何ともする能はず此時矢崎少尉戦死せり其後更に火薬の装置を企てたれど成功せず

暗夜爆裂の命令

是に於て小原聯隊長は此困難の事情を上官に報告したるに山口師團長は命令を下して曰く白晝にては工兵の動作自由ならざるを以て今夜九時十時の間を待ち暗に來して爆裂すべしと斯くて城門破壊の舉

は一時見合したるも砲撃は依然とし

晩景迄之を續け敵は尙ほ城門を守りて動かざりし

我兵裸體火薬を装置す

城門爆裂擔任は工兵第二中隊にして其擔當者左の如し

第一門破壊隊

隊長 土屋 大尉

特務曹長 津田 廣一

仁科須奈市 小野権一
 小川弘吉 玉野龜吉
 荒卷治石衛門 由田廣吉
 橋崎音松 河内伍市
 坂本益太郎

第二門破壊隊

隊長 田阪少尉
 山田信一 三好克市
 岩見又市 藤中實太郎
 種本太宰次 的場鹿造
 田阪熊一 山田偵五郎
 石丸銀右衛門 杉本周市
 中村桂助 小野百藏
 升本嘉市 森岡萬藏
 奥本彌次郎 小林年藏
 沖田喜太郎

以上の諸士敵の注目を逃げん爲り、裸體と爲り九時前より準備し九時より火薬装置に着手せり此時月は天空に現はれしより先き降雨ありて陰雲月

を蔽ひ四面暗黒なりしかば此の機に乗じて裸體の工兵は敏速に火薬を装置せり

敵は之を曉り猛烈なる射撃を加へしも工兵は屈せずして九時三十五分第一門を破壊し次で直に第二門を破壊せり

三大隊の突貫

城門は斯くて破壊したれば第四十一聯隊第一大隊は佐伯少佐第二大隊は小倉少佐第三大隊は井上少佐各之を率ゐて順次突貫して残兵を驅逐し第十第二の兩大隊は我公使館に向て走せ第三大隊は北

に折れて東直門の攻撃軍を助けたるに此時東直門は既に破れたるの後なりしを以て引き回へして朝陽門内の倉庫を占領せり

村山少佐東便門に向ふ

次に第十一聯隊の朝陽門外に達したるは午前八時過ぎにて第四十一聯隊が將に烈しく敵に迫りつゝある時なり聯隊長は先づ村山少佐をして第三大隊を率ゐて朝陽門の味方に應援せしめしが己にして露軍は東便門を破れりとの報あり依て取り敢へず其大隊に命ずるに東便門より公使館に進むの任務を以てし其儘出發せしめたるに東便門破れたりとは虚報にて同大隊は引返し來れり然るに午後六時前に當り又東便門破れりとの報あり今度は擧の第三大隊に第一大隊を加へ粟屋聯隊長之を率ゐて福嶋少將と共に進みたるが同門は果して既に破れ居たるを以て露軍に次で同門より突進せり

露軍の死傷

其將校斥候の報告に誤られて輕率にも獨り抜け馳けの功名を收めんとして東便門の先登に於て露軍は豫期したるよきは手強き抵抗を受け聯隊長は戦死し參謀長も重傷を被り其他死傷甚しく敵の捕虜となりしものも甚からず急を告げて救を日本軍に求めたり

崇文門を入りて我兵先頭に進む

斯て我二大隊は東便門を經、堀に沿ひて崇文門に到れるに門は全く閉ぢて押せども開かず然るに門と地上との間に一尺許の間隙あり林大尉輕便電燈を携へ頭を突入れて窺ひ見るに門は一枚板にして而かも此邊には敵兵の雙影なかりしを以て歩兵十名許を率ゐて其門下より進入り更に門樓に登りて見るに此門は櫓にて繰り上ぐるの装置なりしかば乃ち歩兵十名餘にて馬の通行

に差支なき迄に繰り上げ、**我兵先頭**となりて進行し、露兵之に次ぎ午後八時五十五分**公使館**に着したり。

公使館の歡喜

我兵及び露兵の公使館に着するや我居留官民は勿論各國の居留外人歡喜の狀言語に盡し難く外國夫人の如きはプランデー杯携へ來りて**我兵に薦め再生の恩を謝せり**

印度兵先登第一

然るに之より先き早くも居留地に達したる外國兵あり是即ち一隊の印度兵なり思ふに英軍は豫て容易に居留地に達すべき道を暗知したりと見ゆ聯合軍が正面より北京城を攻撃しつゝありし間に少數の印度兵は奇功を奏して**最先**に城内に入りたるなり今印度兵が最先に入城したる次第を記さん英國公使

館と日本公使館との間に一條の溝ありて長く城壁に通じ城壁の下には又其流を通すべき少許の間隙あり折しも溝水全く涸れたれば印度兵は安々と**此水門**を潜り入りたるに敵は少しも此邊の防禦に就て意を用ひざりしかば一の**抵抗**もなくして英國公使館に達したるは其日の午後二時頃なりし

十五日の動作

公使館に進める第十一聯隊一個大隊は十五日朝安定門外に移り一個大隊は公使館護衛として留まり其内一個中隊を以て十五日朝戸部に入り**二百萬兩を占領**せり

東直門外の戰鬪

第二十一聯隊の東直門に向へることは前記の如くにして此門は朝陽門同様**要害堅固**にして**此方面に進むは非常に困難**なり加之

て暫く工兵歩兵の動作を止め其砲撃に敵を悩ましたり

東直門の破壊

午後六時頃山口師團長より命あり今夜九時十時の間に東直門を破壊すべしと其擔任者左の如し

第一門破壊隊
長 井上大尉
池上榮助 佐伯盛藏
河田勇吉 中岡恒次
藤本勘平 水津彦太郎
鈴木光次 高尾嘉市
澤井三塊

第二門破壊隊
長 村山少尉
小野喜之市 山根武太郎
樋口鶴吉 藤田作太郎
森川百介 笹井宇市
御神村運吉 片岡中藏

東直門も亦容易に破れず

此時機を利用して城門を破壊せんとしたるも敵兵壁上に現れ而かも**其數益増加**したれば右の獨立家屋より一歩も前進し難く到底白晝敵の瞰射せる下に在りて之を破壊すること能はざるは明白となりしを以

射擊猛烈にして我歩工兵前進困難なりしかは**砲兵陣地**より東直門附近の敵を盛に砲撃したるに敵は遂に支ふる能はず城壁上より逃げ去りて壁上には敵の隻影を留めずなりし

之を破るには亦工兵の手を借らざるを得ず依て十四日午前十一時頃師團長の命令に依り工兵大尉井上親太郎氏は工兵第三中隊を率ひ竹中第二十一聯隊長指揮の下に東直門破壊の任務を授けられ歩兵第十八中隊と共に其門を距る三百メートルの獨立家屋に達したるに東直門は勿論朝陽門に至る城壁に沿うて敵數多く其の

外套を着し先鋒は第一門破壊隊は井上中隊長の率ゐる掩護兵、又第二門破壊隊は之に次ぎ密に前進せしに途中敵の射撃を受けたれども八時五十五分三十黄色火薬を用る燐寸と點して咄嗟の間に第一門を爆發せしめ朦朧四方に満ちたる其暗さ紛れ直に第二門を爆發せしたるは九時二十分なりし

工歩兵聯絡の危難

斯の如くに於て二門共破壊されたれども城門は我工兵の所在地と遠く離れ殊に當時は尙ほ敵の銃聲盛なりしかば我歩兵は互兵の城門を破壊したる事を知らず依り

て喇叭卒は銃聲に混れざらんが爲め殊更に君代を吹奏し城外にある歩兵に對して合圖をなしたれども其甲斐なかりし是に於て傳令を發して之を通報したるが其間敵は絶えず壁上より射撃し又煉瓦銀塊など投付けたり

第二十一聯隊の突貫

暫くにして第二十一聯隊は隊伍整然として突貫せしが城門の狭さが爲に全體の動作自由ならず敵は城壁の上より益々盛に射撃し我兵は爰に約九十名の死傷者を生じ敵も甚だしき損害を受け數百の死骸と七十餘門の大砲を遺棄して潰走せり

第二十一聯隊は全く敵を撃退せる後翌朝第一大隊は徳勝門第二大隊は朝陽門に向ひたり

第四十三聯隊は十四日の北京攻撃に於て柳團の本隊として城門に與らす此夜第十一聯隊の朝陽門を破壊したる後城中に進入せり此時師團長は此聯隊を第九旅團に屬せしめ一個大隊を師團の總隊備として殘し置き殘部一個大隊半は渡邊大佐之を率ゐる皇城の東安西安タイ、北安の四門を保護するの任務を命じたり

皇城内の敵と戦ふ

豫ての方略にては各一個中隊を以て各門の守備に當らしむる筈なりしも皇城内には多數の敵兵ありし故全部東安門に向て前進せり皇城に對する動作は是より始まらんぞす渡邊大佐の率ゐたる一大隊半は東安門に進行中敵の少數なる歩哨に會して之を撃退し夫より先鋒は散兵を敷き東安門の敵を應戦せり併し最初の命令には成るべく皇城に向て射撃せしむること勿れとの事ありしを以て東安門に向はざる方

向に於て散兵を布き接戦しつ八十五日の曉に達し再び尖兵小隊を散兵とし其他の諸隊は之に次で東安門に近き門扉城壁に寄付き門を破らんとせむに敵は三面より射撃せり我兵喊聲を揚げて門を排き一部隊は突貫して前進したるに堀を隔て、敵あり二三百米突の距離にて射撃し門外に留まれる大部隊も道路の兩端より射撃を受けて苦戦し二十餘名の死傷者を生ぜり我兵之に抵抗するに便ならざるを以て射撃を中止し砲兵隊の來るを待てり渡邊大佐此間に

野砲中隊の來援

八時頃師團長の命に依りて野砲一中隊來り援ふ其地狭くして砲列を布くに不便なりしかば東安門の前なる十字路に陣地を布き野砲二門を以て東華門を越て皇城を砲撃し又野

砲の効力を大にせん爲め橋に東安門内に入りたる歩兵を引上げて門下に進め門扉を肩墻に代へ砲撃して夜に入れり

十六日の戦闘

十六日朝砲撃は又々續けられたり敵は皇城の西より德勝門外なる第二十一旅團の所在地に向て射撃を始めしかば藤澤砲兵大尉は砲兵一中隊を率ゐる第二十一旅團より掩護歩兵を借り皇城西北角の橋を砲撃したるに敵なし

更に進みて西直門より千メートルの距離にて端郡王の邸宅を砲撃して二百餘發を打てり敵兵及び義和團の同邸宅に居るもの良民と稱して逃れ出づ一々檢視するに皆偽なりき

十一時頃火を放ちて同邸宅を焼く午後三時頃同邸宅の焼失と共に皇城には殆んど敵なく聯合軍はタイムン門

各國軍占領區域

十六日各國協議の結果日本は朝陽門より府城に一直線を劃して其北部全體を、又正陽門を中心として露佛は其東を、英米は其西を占領區域とし各自民政廳を設け我民政長官には柴中佐任せらる

北京籠城日録

六月十九日

是より先十三、十四日の兩夜義和團の交民巷(各公使館所在地)を襲ふあり、各國陸軍隊、義勇隊警戒甚だ力む、此日午後七時西公使の命あり、吾義勇隊は盡く公使館に集れど、衆未だ其何事たるを知らず既にして西公使厲聲告げて曰く清國政府は本日午後四時公文を各國公使に送り列國妄りに兵を動かして既に大沽の砲

を我兵は東華、西華、西安の三門を守護するの任に當れり

我軍の戦利品

はクルツプ砲五門舊式砲百門内外擡槍銃彈藥軍旗無數馬蹄銀二百五十兩玄米二萬石外に公用書類

我軍の死傷者

十四日より十六日に至る三日間の攻撃に於て敵兵の死骸を發見されたるもの六百余、我死傷は將校以下二百余名にして其重なるもの左の如し

- 歩兵第四十一聯隊 矢崎少尉(戦死)
- 歩兵第四十二聯隊長 渡邊大佐(負傷)
- 同 東中尉(同上)
- 同 尾寺中尉(同上)
- 同 飯田少尉(同上)
- 同 後藤少尉(同上)
- 歩兵第二十一聯隊 富田大尉(同上)
- 同 道家大尉(同上)
- 同 武内中尉(同上)

臺を奪へり平和は遂に破裂せり列國公使は二十四時間公使館を撤退すべしと是に於て各國公使は相議して斷然北京を去ることを議決す但準備の爲二十四時間を延期して四十八時間となさんと求めたり、未だ其回答に按せずと雖も吾人は遂に北京を去らざるべからずモ一かうなれば戦を行かざる、處まで行て見て死なば一緒ぢや、衆聽て愕然たり蓋し今に於て事の茲に至らんとは何人も豫想せざりしなり

此夜引上準備の爲終宵眠らず公使館にては途中の糧食として燒米數俵を用意す

二十日

午前十時獨逸公使ケツテル男引上に就き協議せん爲總理衙門に赴のんとして途中清兵の爲に銃殺され隨行の翻譯官も亦負傷す、是に於てか引上の議遂に一變し交民巷を死守して援軍の來り救ふを待つ事となれり蓋

し恃むべからざる清兵の爲保護を受けて北京より天津に赴くは薪を抱いて火に赴くよりも危げれば也

各國の婦人小兒皆英國公使館に移る

總理衙門の答書あり、二十四時間の期を延して四十八時間となすの請を容ると、既にして午後四時頃國公使館の方面に於て突然銃聲起り埃佛兵死者各一人是れ清兵否清國政府が各國公使以下千人の外國人と七百の耶蘇教民とを二箇月の間死地に陥れたる手始なり

夜間流丸頭上を飛ぶもの多し

敵丸は北、玉河橋より飛來るもの多し而も烟は見えて人見えず、大學堂教師佛人某あり、吾陸戰隊守備線に來り共に兵を出して税關内を搜索せんことを求め六名の兵を率ゐて至る吾は二名を出し吾輩亦隨ひ行く滿邸間寂、未だ一敵兵を見ず

敵は昨日より主として吾陣地の東北より迫り來る埃兵戦利あらず其公使館に火を放たる

耶蘇教徒皆決死の色あり此日突貫して義和團匪一人を擒にす此時官兵と團匪と既に相合して交民巷に迫れり

二十二日

朝來東北部の戰稍激しく午前十時頃兵支ふる能はずし退き次に佛國日本の兵亦退て英國公使館に入る蓋し豫め戦ひ利あざれば各國兵は英館に入りて防戦する約ありし也、既にして各國兵又英館を出でて舊戦線に就く若し此際清兵大舉肉薄し來りしならば交民巷は久しからずして陥りしなるべし天祐なる哉敵は我退却するに際して毫も追撃をなさず遂に各國兵をして再び舊戦線に就かしめたり

英國公使館火起り一棟烏有に歸す婦人紅袖を捲て水を運ぶ者あり、聞く英國公使マゴドナルド氏は各國公使

先各國士官等兵少きが故を以て之を占領して敵を扼するを難んず、二十二日に至り我陸戰隊遂に意を決して之を占領せり、此日(二十四日)敵は府の北壁下に集り壁を破りて入らんとす吾兵苦戦し伊、佛、埃の兵若干來り援ふ午前十一時義勇隊長安東歩兵大尉(辰五郎)吾陸戰隊五名、埃、佛兵二十餘名を率ひ府東の民家の塙を破り門を壞り潜行して府北の敵を衝かんとし途に敵に要撃せられ退却す此時村井氏は通譯として隨ひ行けり一人の佛兵は昇して敵火の中を驅け搦んとして大傷を負へり退て營に歸るや英館急を告げ援を吾に求む安東大尉又陸戰隊五名を率ゐて赴き援け英兵と共に突貫して敵を撃攘し火を館北の民家に放ちて歸る、敵、屍五六を遺して退く、皆董福祥の軍なり

傳ふ昨夜獨兵屋上にありて遙に二道の烽火を望む午後五時頃南方に殷々たる砲聲を聞く皆曰く援兵來れり

を代表して故なく官兵の發砲することを禁せんことを總理衙門に要求せり也

二十三日

午前、敵は又た東北の方面に迫り埃兵又退て佛兵に合し佛國公使館に據る破裂彈交民巷に落つる者多く日本公使館門上彈片雨下すること兩三回、二十日以來第一の苦戦とす義勇兵中村秀次郎氏匪徒一人を斬る

翰林院、敵の爲に燒かる

夜、ハンダリ雜貨店燒く其吾公使館に近きを以て義勇兵大に消防に力め繼に類焼を免がる

二十四日

午前、敵大に肅親王府を攻む、親王府は玉河橋を隔て西に英公使館等と對す、此地若し敵に占められんか敵は直に府内の林丘に據り英館を撃つを得べく又英館と日、埃、佛、獨、諸館との聯絡を失ふの虞あり是より

午後敵大舉して親王府に迫る頃刻にして退く

二十五日

八時頃より砲聲雷轟親王府北に起る蓋し敵は今日も亦府北の壁を破らんことを力む、壁を隔て、耳を傾くれば其音憂々として暫くも止まず我義勇兵府内の庫を破り絹帛の類を以て土囊を作り胸壁を築きて守る青紅線白、然とし人目を射る

是より先吾居留民は義勇隊を組織したれども其武器は多くは刀槍の類にして外に獵銃ピストル四五挺あるに過ぎず、此日佛國兵が敵を殺して得たる所のモーゼル銃六挺を譲り受け朝日の村井啓太郎文學士狩野直喜、東京日々通信者古城貞吉の三氏は敵火を冒して胸膈外に出で銃二挺、彈丸數十發を敵屍の中より取り歸る、此時敵屍既に半は腐敗し肝膽露出して銃身に纏綿せり銃を用ふる事數日腐臭始めて去ると云ふ

午後二時義勇兵中村秀次郎氏佛國公館々北に戦死す、夕、敵は頻りに喇叭を吹奏しつゝ、引き上げ去る、府北

又一兵なきが如し、既にして聞く敵は北玉河橋上に白旗を樹て又『旨を奉じて使臣を保護し嚴に開鎗を禁ず文書の往復は橋上に於てせん』と書きたる板を掲げ出せりと、同時に彼の軍使らしき者來らんとしたるを英兵射撃したるを以て逃げ歸り吾より出したる使者(支那人)又敵に銃を向けられて行くを得ざりしとす、開戦以來既に死を決したる人々も之を聞て支那政府の意志真に一變したるにあらざるかを疑ふものありたれども多くは吾をして警戒を怠らしめんとする支那流の謀ならんことを信せり果せる哉夜半突然四方より襲來し白旗の狂言に心を弛めたる早合點の連中をして大に膽を塞うせしめたり

二十六日

親王府内外の防禦工事益々進む

公使館を守備せる義勇兵館門を閉て皆吾陸戦隊の防禦線に増加す、此日戦稍も閑なり

二十七日

午前三時四面夜襲を受く暫くして引き去る、味爽より敵は府北の壁を破らんことを力め暫くも休まず府の壁湖からずと雖も固より三尺を過ぎず敵之を破らんとしてより既に三日、計るに今日頃之を破り得て必ず突入し來らん、來らば來れ吾に備ありと片唾を呑んで待ち構へたるものありとも知らず午後二時に至り吶喊の聲大に起ると同時に一時に壁を打破りて入り來れり、御座んなれど吾は三面より息をもつかず聲を出せば彼は不意を襲はれたるもの、如く周章狼狽退却して屍を遺すこと二十四個、後に敵は長さ棒を穴より出して死骸を引懸け運び去りたるもの數個、敵陸戦隊町野右

衙門此 戦に死す

此報廣く外人間に傳はるや英國公使よりは柴中佐に書を送り日本人の今日の成功を喜ぶ旨を述べ來れり、數日の苦戦此一快戦を以て聊か自ら慰むるに足るを覺ゆ

二十八日

敵は府北の突入に失敗し今朝より方面を改め大砲を以て府の東門を破らんとす、彼破れば我構るはんとすれども敵火熾にして意の如くならず人夫の傷くもの十三人吾兵大に苦戦す、東門附近の樹木敵丸の中たるもの多く遂に寸青なきに至る、夜同方面銃聲絶えず

二十九日

敵砲を用ゆる事愈々多く七、五珊知の花環榴彈あり此日吾れ戦利おらず敵は遂に府北の破より進入し家數棟を焼けり、此日砲彈飛で日本公使館に落ちるもの多

三十日

晝間戦稍閑なり、午後十時頃より翌日午前三時に至る間敵大に親王府を攻む此時雷一太に起り電光、銃火並に起り黑夜忽ち白日の如く凄じき事限なし陸戦隊鎌田萬次郎此戦に死す

誰が吹聴せしかは知らざれども今日外國人頻に來り問ふて曰く日本公使は天津より日本兵近く北京に來べしとの通信を得たりと聞く真偽如何と而して其實此事なければ知らずと答ふるの外なかりしも吾は何となく氣の毒の感に堪へざりき (未完)

北京籠城中外交文書(一)

六月十九日大沽砲撃の後に列國より先づ開仗したるを責め二十四時内に一同の退去を求むる意味の公文

親王殿下及端親王に謁見せん事を求む至急回答あれ斯くて公使等は翌朝二親王に會見せんとしたるも第一着に出頭せんとしたる獨逸公使の遭難等ありて會見は見合せせとなり引續き在京の事を清國政府も承諾しながら却て官兵をして公使館を攻撃せしめ其翌日六月二十一日より七月十四日英國公使館使丁が官兵に捕へられて慶親王の書面を齎らし歸りたるまでは彼我の間に何等の往復もなし右慶親王の書面は左の如し

過る十日間兵勇及義兵と戦ありて互に交通の出來ざりしは吾輩の大に怨とする所なりし過般吾輩の意見を表白せんが爲め掲示を掲げしに恨む遂に何等の返事もなく却て外國軍は攻撃を再び始めたり是れ吾兵士及び人民の一般に駭異するところなり昨日の一の教民金性を捕へ是れに依りて各國使臣の恙を了知し大に悦べり計らざりき不意の出來事は外國援軍の義和團の爲めに撃退せられたることなりし吾輩は若し以前の約束に因り閣下等を城外に護送せしなれば天津大沽間は義和團多くして路上如何なることを生せしも知る可からざりしなり吾人は今閣下等に望む先づ第一家族及び各國の

を清國政府より公使館に致したるに對し同日公使等より答へたる文書は左の如し

我々公使等は總理衙門より本日附の通牒を得て大に驚愕の至りなり通牒に所謂大沽砲撃の事變は我々の毫も關知せる所に非ず我々は總理衙門の宣言要求を領取するの外なく北京を立去るは敢て辭する所に非ざれども僅に二十四時間内に出發の準備を整ふるが如き實際に能くす可き事に非ず清國政府は宜しく我々外人中には多數の婦人小兒あり輸送の準備も大に整へざる可らざるの事實を考量せらる可し總理衙門は途中の保護を我々に保証せらるゝとの事なれども其保護は如何なる保護なるやを承知せざれば各地に無頼の徒の出沒極りなき今日容易に安心す可らず我々は我々に對して清國政府が非望を懐く可べしと疑ふものに非ざれども今や外國兵は來りて官兵に力を合はせ秩序を恢復せんとして既に其途中に在るが故に直に右の外國兵に報じて我々の許に來らしめ之と共に北京を退去せんことを期望す且つ我々は船車等の輸送具及び糧食を支給せられ尙ほ總理衙門幾名か同行せられん事を要求せざる可らず此等諸事協議の爲め我々公使等一同明水曜日午前九時慶

士民を連れ公使館を其兵士に委し而して我等は信據すべき官吏を派し之を嚴重に保護せしめ而して閣下等は暫時總理衙門に移られて以て閣下等を本國に護送するに就き將來の取極めを待ち因て以て終始厚誼の保存を計らんとを左れ公使館を去るに際し決して一人の武装せる外國兵をも連るゝ勿れ若し然らんか吾兵勇人民に疑惑恐怖の心を生じ不意の事あるやも知れざればなり今閣下に望む閣下若し此信賴を表するを欲せば北京なる各國公使に此事を告げ明日正午再び此使者をして返事を齎らせられんことを然らば吾等は豫め公使館を立去るの日を定め得るを得ん是れ目下の急を救助する唯一の計なりと信ず若し期時に際して返事なくば今や致方なきを以て最早閣下等を救助する能はざるなり敬具

七月十四日

慶親王等

右に對しての返答には外國兵の攻撃云々の事を駁し彼等は唯清國官兵の攻撃に對して生命財産を保護するに過ぎざりしと云ひ總署行は出來難しと斷り終に答ん支那政府にして商議を望まれなば責任ある官吏に白旗を持たしめ送られん事を告げたり



彙 報

事變の終局容易に非ず

皇帝西太后は董福祥の兵に擁せられ皇太子は端親王を奉じて各々 京を退去したるに付ては列國公使の北京に在るは恰も他の空屋に居ると同様にして前後處分を施さんにも殆ど手の附けやうなし逃げたるものは呼べども容易に來らざるは明白にして假令ひ或は其本人は歸京を欲するも部下の護衛兵は義和團の徒なれば他迄これを抑留す可きは疑ふ可らず或は其禁地より李鴻章輩に命を傳へて平和談判を開始せしめんか斯の如く頑固黨に擁せられて進退の自由を失ひたる主權者が何如なる詔勅を發するも其詔勅は正當のものと思ひるを得ず列國は之を相手として媾和談判の開議に同意

せざる可不ならん左ればとて皇帝西太后を別にして新政府を作らんとするも容易に其人を見出す能はず平和條約の締結を告ぐるは何れの時にある可きや今日に於ては殆ど豫想するを得ず况んや曲りなりにも政府を組織して此に事件の一段落を告ぐるも列國兵は尙ほ支那の領土に駐屯し新政府の政令は普く行はれずして其間には此所彼所に紛擾を生じ一波又一波眞實事件の終局を告ぐるまでには數年を要す可しと云ふ

露國の提議

在北京露國公使は聯合軍が北京を占領するは媾和に害あるべきに付一應北京より撤兵して大沽若くは天津に引 け清國政府をして媾和に着手せしめんと本國政府に申出たるに本國政府も此提議を容れ露國公使は之を李鴻章に傳へたり

日本は撤兵せず

我政府にては聯合軍が北京を占領したる翌日に於て第五師團の兵が急に公使館を救はんが爲め非常の激運動を爲したるの結果甚しき疲勞の体に陥りたるを察し相當の戍兵を殘留するのみにて直に他の全部の引揚を命

列國 協商 破綻の端緒

外交の大局に就ては曾ても報せし如く奇矯なる獨國皇帝が露國を動かして如何なる態度に出でんとするやも知るべからずとの懸念ありしが外交社會にぞは露國の間に密約成立し露は滿州を收め獨は山東より英國の勢範と稱する楊子江右岸に向つて爲す所あらんとし且つ我邦の福建に對する意向を摸索せんとする形勢ある旨沙汰し居れり獨帝が公使の被害に墮り上りて得たり實しとされたる態度、約七八万噸の軍艦を東洋に増遣し過大の陸軍を北京畿定後に進發せしめんとする形蹟に徴すれば此事は有られ得べき事實なる故帝國は固より之に對する覺悟あるべき筈にて今更驚くべきに非ず但だ政府が從來確たる方針を立て、之に對する計畫を全うし居りしや否やは疑問にして心元なき感無きを得ずと某外交家は評せり

せんとの議ありしも北清の一部局に對する運動は此まで總て他の列國と協同一致し來りたる經歷に對し單獨擅恣の行動を爲すを以て友を失するものと爲し遂に其ま、今日に至りしが今回露國政府が獨り其軍隊を北京より天津に引揚げんとするに對し(名分は多少の戍兵を殘すことならん)その意思の何處に在るに拘らず或は又之れと同様の處置を爲さんとの議も起る可し但し我政府は矢張り最初之意思を取り北清の一部局に限りては列國協同の範圍を出づるを不利とし英米其他の列國軍が一同引揚げに決するまでは依然として今の地位を保つ可しと

天津附近の偵察戰

天津に在る日英聯合の歩騎兵は去月十九日郭家村（郭家は天津城の西南約三里に在り）附近にて偵察戰をなす。騎兵は河南フジョウ附近にて約六百の拳匪と遭遇し之を擊退したり敵の死者約七十又歩兵隊は郭家附近にて敵と遭遇し之を擊退したり敵は約四百にして小扁庄に退却せり敵の死者四十我負傷一なり

外兵の慎重、清兵の亂暴

支那ガゼットに達したる北京特電に據れば聯合軍は皇城にあり左れと禁苑に入らず尙ほ本國よりの訓令を待ち居れり清兵は外人の墓地を發きケツテルン公使の棺を奪へり清人改宗者の婦人小兒三十名北堂教會に於て地雷火の爲に殺さる云へり

北京總攻撃と露軍

北京の南門に向ひし露軍は是迄になき勇敢なる働を爲

の食料を用意したるのみ左れば其後近隣の支那人の家に就きて米穀を買求め或は英國公使館よりも供給を仰ぐの窮境に陥りたり居留民が此の如く苦戦し此の如く粗食しつゝ病を醸さるは必竟するに敵愾の氣、内に滿つるものあればなり

居留人の一倅と教民の慘狀

公使館に籠城せし我居留人は何れも顔容枯槁して籠城中の慘苦を表彰せるもの、如し、聞く籠城中の食物は朝は玄米の粥、晝は麥飯、夕は麥にて作れる餅にて副食物とては昆布汁のみにて偶々馬を屠る時は無上の珍味と舌打鳴らして喰ふ有様なり、特に慘鼻に堪へざるは英公使館内に避難せし教民にして彼等は草木の葉を喰ひ辛ふじて壽命を繋ぎ餓死せしもの亦少なからず

居留地の防備

居留地防禦工事は案外堅固にして其周圍及び支那街に

し午後三時頃には第一門を破りて進入し今や將に第二の城門破壊を企つる際我第五師團長山口中將は使を露軍に遣はし其形勢を聞取らしめたるに露軍司令官の所在不明なりしかば此處彼處と尋廻りたるが此時同國の某士官は我司令官は軍の先頭にありと告げたり使者は之を開き彈丸雨飛の間を踏分けて漸く司令官の許に到りしに士官の話に違はず司令官は歩兵前兵の中に在りて熱心に軍隊を指揮し居たりと云ふ露軍が今回比較的早く其一部を城内に進めたる所以のものは全く司令官の率先して一軍を指揮したるが爲なりとて其勇敢なる働は一般の評に上り居れりと云ふ

食物の欠乏

團匪不穩の形勢ありと認むるや英國公使館の如き非常に苦心奔走して數多の糧食を用意し籠城中も食物には比較上困難せざりしに反し我公使館にては當初二週間

通ずる道路は一面に煉瓦を築きて壘と爲し殊に英國公使館の如きは最後の堡塞と爲りたる事とて據上樓下一體に土袋を積重ねて障壁とし以て敵丸を避けたる等用心中々堅固なり而して居留地の防禦方略は大抵我柴中佐の方略に成り其評判頗る内外人間に喧すし

外國婦人の勇氣

籠城中に於ける外國婦人の舉動は甚だ大膽活潑にして掩堡の築造などを手傳いて善く陸戰隊及び義勇隊の動作を助けたるなど仲々目覺しかりしに引換へ我國の婦人は内に引籠りて外の騒ぎを聞くのみなりしと

進軍中の美人

(露國婦人の健氣)

北京の急を救はんや憚りに憚りし聯合軍は馬に秣する暇もなく自ら糧を採取さへも時を惜みて直押しに進軍なし八月十日午前四時星を載いて支帝廟の露營地を發

し大安平江家庄、監庄を経て 後五時と云へるに全軍馬頭に着きにけり此日は引續ける炎天に宛がら燦くが如く我國にては臺灣の外に見も知らぬ華氏百廿度と云ふ酷熱なるに數万の軍馬の進むことなれば熱砂は烟霞の如く飛び散りて征衣に塗れ日射病に罹りて路に倒るゝ兵士も擗からず國の爲とは云ながら慘らしくも又哀なり斯る處に露西亞軍の其中に年紀三十路に足らぬ婦人あり姿優しく風にも堪へぬ風情なるに身には白色の衣袴を纏ひ腕に赤十字の徽章を懸け小き帽子を戴ける外編頭傘さへ持たで甲斐甲斐しくも自國の兵や將軍の負傷を助わり慰めつ死者を吊ふ健氣さは三軍も爲めに感激して進んで死すとも退いて此婦人に笑はれまじと願はぬものはなかりしとぞ此 我が軍隊にも斯る婦人の居たりせば多涙多感の勇將猛卒は幾何計りか胸みつ奮ひつゝ今の手柄に上越す功名ありたらんに惜みても

猶は餘りあり實にや彼の露國婦人こそ天の使と云ふべく万級叢中一點の紅と云ふべけれ夫に引き替へ北京籠城の我公使館に居りたる婦人其の心がけ苦々しき限りと云ふべし

倫敦タイムズの社論

八月廿日發見のタイムズ新聞は其社説に論して曰く列國公使の救援は主として日本國の力に由る是世界全般の感荷する所なり他の列國が一擧して自其國人の生命を救ひ其國旗の榮光を保つ能はずして空しく其使臣の虐殺を傍觀するの屈辱及痛恨を免れしめたるものは日本國にして日本國は眞に歐洲列國の伴侶たるに愧ぢざるものなり日本國が人道の爲に此重要なる勞役に當るを辭せず亦能く之を成功したるは美舉にして列國に先して之を認識したるの榮譽は日本國が寛量能く公道の爲に假すを吝まざりし貴重なる助力を求むるの必要

を他の列國に切言したるの榮譽と共に宜しく之を英國に歸せざるべからず云々

清廷御前會議の顛末

北清日報は避難者の手より出でし北京公使館攻撃開始前清廷大會議の模様を掲載せり其一斑を譯載せんに左の如し

清帝は和戰大會議の議席に臨御し沈黙を守り居られしも心痛の様子龍顏に現はれ眼に涙さへ浮べ居られしが此際帝は何事をも爲し得らるべき機能及勢力無く滿洲人の爲めに甚しく侮られ居らるゝことなれば只斯る消極的態度を以て滿洲貴族及大臣等の政略に不同意を表せらるゝの外他に詮方あらざりしなり然れども主戰論の勢ひ熾にして其勝を制せんとする模様見なければ帝は最早忍ぶこと能はず願ひながら御前の左一尺程に着坐せられし西太后に對ひ各國を相手として戰はん

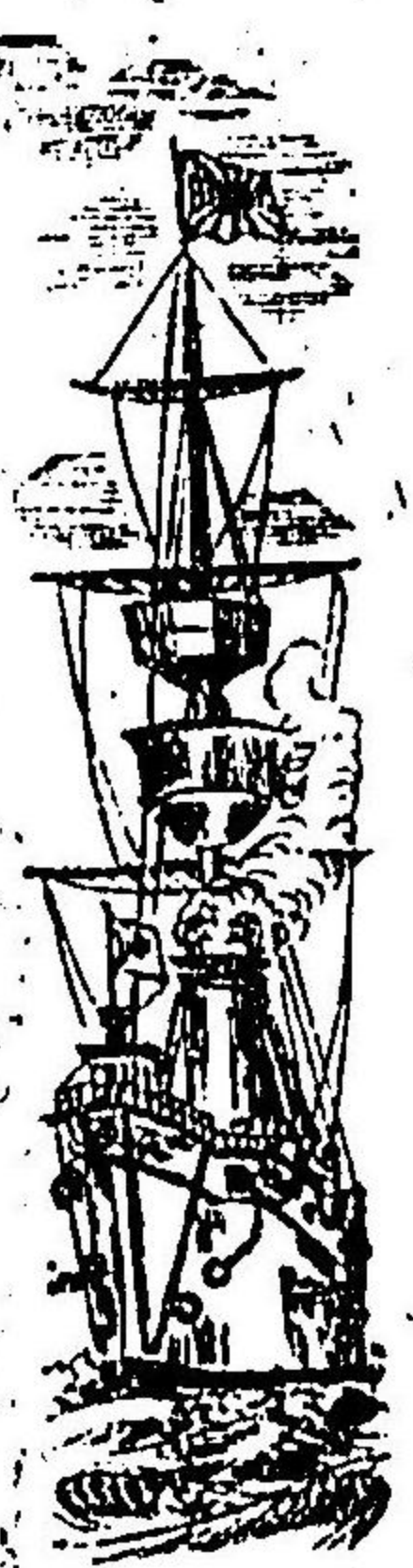
の決心に付ては再考あらせられたし一度斯る亂暴なる運動を始むる以上は最早將來に於て和を講ずる望絶の國家滅亡の端此に開けんぞ哀訴的に述べて尙も唇を續けんせられしも俄に中止し給ひぬ何となれば西太后は朝廷の儀式あるにも拘らず帝の勅語を謹聽せずして公然之を叱斥し剩さへ帝に背を向られたるを以て帝も口を閉ぢ給ひしなり是ぞ漢人派(即ち非戰派)の最後の一言にして同派の言ふ事は後滿洲派(即ち主戰派)の雷々たる聲に壓せられて聞かず滿洲派は異口同音に開戰の論を主張し且つ深く開戰に反對せし漢人派の同僚を嫉視し今は公敵及叛逆人を以て彼等と呼ぶに至りぬ滿洲派の勢ひ右の如くなれば漢人派は暫くは西太后に對し再び非戰を主張する機會を得ざりき同派の目的は先づ義和團解散の詔勅を發し若し其抵抗するに於ては兵力を以て團匪を鎮壓せんとするに在り然る

に此派は兵力を有せざることを其望を山東省巡撫袁凱世及び孫士成將軍に風せり蓋し清國の將帥中義和團を鎮壓し騒々しき滿洲人を威服し國家の爲に平和を克復するに堪ふる兵を有する者は他に之れ無きを以てなり然るに端郡王及剛毅は漢人派を制して何事も爲す事を得ざらしめられたれば非戦派は如何に焦慮するも大勢如何に成行くやを知るべからざるに至り且つ同日以後は武裝せる義和團甘肅軍及榮祿の滿洲兵并武衛中軍の規律全く破れ相率りて暴行を逞うするに至れり(未完)

支那人の不忠不義

我第二十一聯隊が東直門を攻撃したるとき同門外の家屋に尙十四五名の支那人在りしが我歩、工兵が門に近かんとする毎に其一人は直に城壁の下に馳付け又壁上より其度毎に銀塊一個を投げ落せり蓋し支那人の壁下に馳付くるは我兵が將に動作せんとすることを壁上の

支那兵に對して相闘するものにして其銀塊を投ぐるは之を賞與するものなり我兵初は全く之を知らざりしが漸くにして之を感知し夜に入りて燭裂の装置に着手せり斯る際に斯る危険を冒しても金儲を忘れざるは支那人ならでは出来得ざる處なれども亦上下の別なく金の爲には不忠不義の行爲をなすつゝ、估として耻ぢざるものも支那人にして支那兵の英館攻撃の際其敵に向て其外部の模様を通報し或は鷄卵野菜を賣り殊に甚しきは密に彈丸を賣込むものさへあり數万の大兵を擁しながら僅に四百の外兵が防禦せる公使館其他を陥る、を得ざるも宜なりと云へし



小説

金鷄勳章 (二)

聽 濤

「此が清さん考へ處ですよ。」

清さんより云ひ放つた四十恰好の上品な御新造は、この室の主山形清三郎の叔母、即ち深川屈指の數間屋山平の細君である。吸ひかけた煙草の煙を一吹き吹

sp. 「宅に被在れば樂にして居られる清さんが、斯うやつて何時までも、不自由な下宿住居をして居なされるのは、些好奇過ぎるぢやアありませんかね。叔父

さんだつて、さう無理な事を被仰るんぢやアなし、宅のよねが氣に適らないのなら、強てと云ふ譯ではない。他から嫁を買つても道らうが、唯彼の人だけは不可と被仰るんですよ。清さんも解つた方の様でも無いぢやアありませんか、夫は徳應立派な方だから知らないけれど、自分のためを思へば、思ひ切れさうなものですがねえ。

清三郎は御約束の色白男、併し世間普通の飽郎ではない。去年の秋まで第○聯隊に入營して居つた、其の間は、一つは心に歸宅後の樂があつたからでもあらうが、非常に職務に勉勵して、上官から褒め言葉を戴いた事も屢々であつた。幼少の時から叔父の他には便る者もない海伴な身の上。叔父の平兵衛も自分に子の無い處から非常に可愛がつて、我が子の様にして育て上げ、妻の親戚からおよねと云ふ

娘を貰つて、やがては是を一對の雛人形と眺めて、自分の後を嗣がせる心算の處が、清三郎は許婚のおよねを嫌つて他に佐野かつと云ふ婦人と戀るにして居る。他から嫁を貰つても宜いと云ふ叔父の粹な言葉に、夫では彼女をど云ひ出した處が、何か理由があるのか、彼女だけはいけぬ、と一言の下に跳ねつけられたので、夫れからは叔父甥の仲兎角宜しからず、遂に今は此の下宿に勘當同様の身の上となつて居るのである。

「イヤ種々御心配をかけまして、殊に這無益の事で、今も叔母さんの被仰る通り、山平の家を嗣がなければならぬ大切な身軀でありながら、家を飛び出して這度安下宿に煙ぶつて居ると云ふのは、他から見れば全然狂氣の沙汰でせう。併し妻を要ると云ふ事は、下女を傭ふ様な譯には行かない。一生共に暮

さなければならぬのですから、互ひに意氣の投合したと云ふ、見定めがなくてはならぬのです。一時の情實に過られて、心に染まぬ人と結婚するのは、後に苦情の起る原因で、夫では實に馬鹿馬鹿しい次第でせう。叔母さんの前では云ひ難いが……併し早く話の解る方が宜いから云つて了ひますが……僕は彼のかつ子さん程、僕と氣の合つて居る人にはなからうと思ふんです。イヤ叔母さん笑らうやア不可い……僕はもう中止させう。

「笑やアしませんよ。ちやんとして聞いて居るのに、自分の氣で笑つて居るだらうと思つて妾を見るから、笑ふ様に見えるんですアね。をかした清さんだよ。ホ、ホ、ホ、」

「それ笑ふぢやアありませんか。」

「夫は清さんがいやに、盗むから夫が可笑いから

さ。そんなのんきな事を云つて居る時ぢやア無いぢやアありませんか。

「爾です……爾です。僕は笑はれても何でも係はないで話します。僕は假令叔母さんか何と被仰らうとも、叔父さんが何と被仰らうとも、今の様な御話ぢやアどうも宅へ歸る事は出来ません。それは斯うやつて居ると随分不自由でもあり、また心細い事もあるですが、併し僕は愛情のためには身を犠牲にする心算なのです。

「まア大變な事ねえ。

「冗談ぢやアないんですよ。是で先方が娼妓とか藝妓とか云ふ商賣の者なら、夫は他人の機嫌氣をとる商賣ですから瞞られると云ふ事もありませんが、もう足掛け五年も交際して居て、互に氣を知り合つた同志、家は確りした商人の娘、夫は男子と交際を

するのが或はあなた方の御氣に適らんかは知りませんが、夫がまた僕の最も敬愛する處で、そんな事を云つてはすみませんが、到底およねさんの様な方に出来る事ではないです。叔父さんは何を何處から聞いて御いになつたのか知らんが、恐らくは誤聞だらうと思ふんです。否僕は寧ろ嘘だらうと思ふんですね。何故と云へば僕には素より叔母さんにも唯「あれは不可い」と被仰る許りで、委しい話をなさらないぢやアありませんか。無い話だから出来る理由が無い。有つた話なら僕の断念する様に委しく話して下さるが宜いでせう、自分だけ承知して被在つても他の者は些も解らないぢやアないですか。

「夫はね、妾もね。

「まア待つて下さい。宜いですが先づ夫が第一ですね。夫から第二ですね。僕が首尾よく兵役をすま

せたり、すぐ家督を譲ると被仰つたのに、昨年歸つて來ても一向其の御話はない。僕は何も家督を急いで自分の天下にして、如何し機斯うし様と云ふのではないですが、約束の違つたのが非常に面白くないですね。

「夫は清さん、夫は無理だ。」

「何が無理です。夫はおよねさんを妻にしなからと云ふのでせうが、夫は今になつての口實と云ふのです。僕が入贅する時の御話には、よねは未だ子供だから、是から先甚なるか解らないから、よねの事は別として家督はついで貰はなければならん、と被仰つたではありませんか。夫ですからおよねさんの事は兎に角、僕は宅に居なくてはならぬんでせう。夫を勘當同様に……」

「まア御待ちなす、夫は清さん一圓に叔父さんが

唯意氣の合つた人の爲に、僕は、

と云ふ時に、對方の室で小さな聲で「ヒヤ〜」と云ふのが聞えたので、思はず顔を見合せた。

「聞えたらうねえ。」

「なに係はんです。今日は誰も居ない筈だが……」

……松井君だらう。

と獨語の様に私語いた。叔母は何となくさまりが悪くなつて煙管を納めて歸り準備を始める。

「まア夫では其の話は、尙妾も叔父さんに能く頼んでみますが、兎に角何時豫備の召集があるかも知れませんから、一時宅へ歸つて居たら宜いでせう。叔父さんと顔を合わせるのが嫌なら、離室の四疊半でも御部屋にしてね。」

「然、實際何時召集があるか知れませんが、併し此の頃は大抵此宿に居ますから、若し召集が來たら

無理だと思ひ込んで居るからなんですよ。氣を落らつて考へれば解ることとせう。

「解りませんね。僕には是以上は決して解りませぬね。」

「だつて清さん、叔父さんは一日も早く清さんを宅へ歸したいのですよ。夫だけれと清さんが例の人の事で強情を張るものだから、夫で叔父さんも、已の云ふ事に逆ぶ者は宅へは入れられない、とかう被仰るんでせう。だから清さんが僅一つ思ひ切つて了へば、宅へも歸れるし、また嫁を貰ふにしても、幾干でも立派な處から貰へるではありませんか。妾に云はせると、叔父さんも強情ですけれど、清さんも強情過ぎると思ふんですね。」

「イヤ僕は宅に歸りたいと云ふのはありません。又立派な處から嫁を貰ひたすのでもありません。」

此宿へ屈けて下されば遅れる様な心配はありません。

「だけれども、夫では猶且叔父さんも妾等も心配ですから、一時宅へ歸ることにして下さいな。些も氣まづい事はありませんから。」

「母さんがそんなに云つて下さるなら、歸つても宜いですけれども……夫では明日の朝まで待つて下さい。明日何とか返事を爲ませう。」

「爾ですか、夫ぢやア明日の朝、返事も何もないでせう信吉に車をもつて來させますから、準備をして置いて下さいよ。どうも長話をしまして勉強の御邪魔をいたしましたね。」

叔母の歸るを送り出して惘然己が室へ戻つて來る後から鐵拳で一つポンと脊を打つて。

「イヨ當世第一流の辯士！」

と奇聲を發したのは、先刻冷評した松井君其の人である。是は清三郎の斷金の友、と云ふのは表向き、實は取り巻きの一人であつて、彼の佐野令嬢の宅へも屢々同伴するは信せられて居る男である。

「君だらう、ヒヤ／＼なんて冷評したのは怪しからんね。」

「だが僕は驚いたね。君の叔母さんの能く饒舌にも驚いたが、君の雄辯滔々、蘇秦其處退け、張儀兼を喰へど云ふ意氣組で、口角泡を飛ばして叔母さんまで吹きどばした手腕には、感々服々したね。あれなら必叔父さんも承知して、君の大願成就近きにありたらうと思ふね。」

「如何して叔父が承知するものか。何だか他で聞いて来た事があるなんて、宜い加減な嘘を云つて僕を瞞着し様として居るらしいが、そんな手段で瞞され

る様な僕ぢやアないんだからね。

「御仕込みが違ふかね。」

「ひやかすな。どうだ貴女の處へ行かうか。」

「そーら初ツた行かう。僕は御馳走になつて有りがたいのを拜聴すべく此の世へ生れて来たのだから。」

「嫌なら止し給へ。僕は一人でも行かれない事は無から。」

「まア待ち給へ。おらゝ勢だね。どうか御静に願ひますよ。」

スタ／＼出掛ける清三郎を、帽子も冠りぬす追ひかけて、門口まで来た時、外へ人力車が駐つて、降りて来たのは先刻話のわつた山平の娘、およね嬢である。

「オ、およねさんか。」

「阿母さんば。」

「先刻歸つたよ。」

と、素氣な挨拶。

「ま、ア、ア、ア行つて違ひになつたのね、清さん召集ですつて。」

「エッ。」

松井も思はず目を圓くした。忙はしく紙片を押し開けば、豫備兵の召集—二十四時間内に師團司令部へ出頭しなければならぬのである。



詞 華

入清偶感

日東逸士

慷慨素期救蒼生、

憤然決志爲此行、

偶 成

不知何處是中華、

請看東方君子國、

不似近世偽文字、

公醫背後吊義勇隊新旗

杉本東洋

月落天傾斗柄掛、

春風別有一番花、

可喜々々

杉本東洋

偶成用東洋詞兄清風亭韻

柏木城谷

半日偷閑臥野亭、

秋風一陣群鴉散、

再三讀城谷兄作、

庚子九月

着想高遠已覺不凡

東洋宏批

白雲斷處認天青、

得意先生讀武經、

毒蛇蜿蜒北清野、

霜冷腰間三尺劍、

風蕭々兮雲慘愴、

使志士血淚 不絕耳

猛虎咆哮北京城、

膂塞壯士千歲名、

想起當年易水情、

雜錄

天步艱難日、丈夫此捐身、
 新墳空烈士、甲第盡義臣、
 雨露思追贈、蘋蘩欠薦陳、
 征人自多淚、相吊獨巾

頭聯壯概、僅千言吊文、
 天賴拜批

大砲の煙りに月の曇り那、讀破翠山
 北京から来る風寒し冬隣、加賀風袋
 弓矢は日本の軍や勝負、東京梅鶯
 占領の地にいささし響虫、豊後花山
 白河に殊更清し秋の水、若狭可笑
 暇かひに騰し處か響虫、備前鶴聲
 是ほこに落して嬉し支那の水、近江蘭士
 敵兵は秋の蝶よりなまじりけり、越前芥水
 清濁もむさう暮け秋の雨、美濃梅島
 行秋や蝶よりもろき支那の兵、越中金袋
 露に伏す哀れや文脈の奥へし、北海道花守

戦死した功のほまれマ魂まつり

菊の本知古



韓帝聯合軍を懇ふ

八月廿三日山口中將より陸軍省に發せる電信に依れば
 韓國皇帝より聯合軍に勅使を派遣せられ米二千匁麥粉
 參千匁煙草二千箱を寄贈相成たりと

清帝の贈物

清帝は外國人の青物に窮せるを聞き二度までも水瓜黃
 瓜の類を贈らる一方には休戦中と雖も尙ほ時々公使館
 を攻撃し更に兵を出して援軍の到來を妨ぐるかと思へ
 ば又た贈物あり殆ど政府の意のある所を知るに苦しむ
 ものなるが是れぞ即ち異日に於ける外交上の困難を減
 せんとするの謀と知られたり若し外人にして其謀に乗
 せられぬ抑も又高價なる青物と云はざるを得ず

獨逸公使の葬儀

在清軍隊冬籠の準備

北清に在る我陸海軍に對する冬季の準備は全く整頓し
 たる由にて漸次回送の運に至るへしといふ

故安藤大尉の行賞

故陸軍歩兵大尉安藤辰五郎氏が私費にて北京に留學中
 事變起り戦死せしに付ては戰闘員に非ざるを以て遺族
 扶助令に適合せざりしも其筋に於ては特に中隊長の資
 格によりて行賞することに内定したる由

廈門の臺灣銀行支店引揚

廈門に暴動起りて現に東本願寺の教會を燒拂はれし由
 あるが同地は簡太獅の勢力頗る盛んなりし處にて其黨
 類今尙は跋扈し匪徒の内には排日本熱を起して臺灣回
 復などの激を飛ばし竊に運動するものある趣きにて兎
 に角不穩の狀況あるに付き臺灣銀行支店は同地を引揚
 げたるよし

曩に董福祥の兵の爲に殺害されたる前獨逸公使の葬儀
 は八月十八日午前九時を以て執行されたり我公使館よ
 りは西公使以下一同、師團司令部よりは山口師團長、
 福島少將以下の各將校會葬し特に陸兵及陸戰隊を儀仗
 兵に立たしめたり而して各國公使及び武官等も亦悉く
 會葬したるを以て其式甚だ盛大なりし

新獨逸公使の一行

新任獨逸公使シユワルツェンスタイン氏は多數の公使
 館附武官と共に去月廿八日上海に着せり其中には曾て
 劉坤一の兵に教官たりしフオンライツェンステン少佐
 及びフオンデルゴルト男等あり

戦地に於ける服装の改正

陸軍省にては今度戦地に限り將校及同相當官准士官等
 の軍衣は夏衣同様の制式(地質は濃紺絨若くは紺絨袖
 章は黒線)を略衣として用ふるを得る事に定めたる由

我水兵の上陸

厦門に不穩の状況あり八月廿五、廿六の兩日に武装せる日本水兵二百五十名を上陸せしめたり

英國兵の上陸

英國軍艦アイシスより八月三十日午後三時水兵約八十人及大砲一門を厦門居留地上陸せしめたり

佛國兵の上陸

八月三十日朝佛國兵約九百七十八人上海に上陸せり

米國派兵を見合す

米國は疊に清國に向け四千の兵を派遣せしが現に清國に在る所の兵力にて充分なりと思惟し該派遣兵をマニラに向けて轉遣せりといふ

四十二哩の軍艦

疊に米國に於ては速力百餘哩を駛走する汽車を發明したるものありしが今又英國に於て速力四十三哩を有する軍艦を造出せるを見る學理應用の進歩も亦驚くべし

英國政府の製造せる新軍艦「バイバー」は去月十二日試運転を執行し一時間實に三十七節強即ち四十三哩に達し優に豫定計畫を超過したり二十世紀の造船航海の進歩を推知すべし

新造軍艦八雲

新造一等巡洋艦八雲は去月三十日無事横須賀軍港に着せり同艦は獨逸にて製造し排水量九千八百噸速力二十節大砲三十五門水雷發射管五門を有する最新式の裝甲巡洋艦なり

戦後穀類の缺乏

大沽北京間に於ける清國民は戦亂却却兵其他あらゆる禍に罹り悲慘の狀を極め居れり最も憂慮すべきは穀類の缺乏にして遂に飢饉に迫るべきのみならず來る冬期に於て凍餓の虞あり此際日本商人より米穀粉類棉製品等を輸入すること專川なり尤も日本商人が河船に依る私品の運搬は極めて不充分にして鐵道の管理に風するを以て目下私人の用に供するを得ず
食料其他冬期必需品は軍隊并に居留民より相應の需用あるべし又鐵道師理統帥製麵人等も有用なり

(本誌九月六日脱稿)

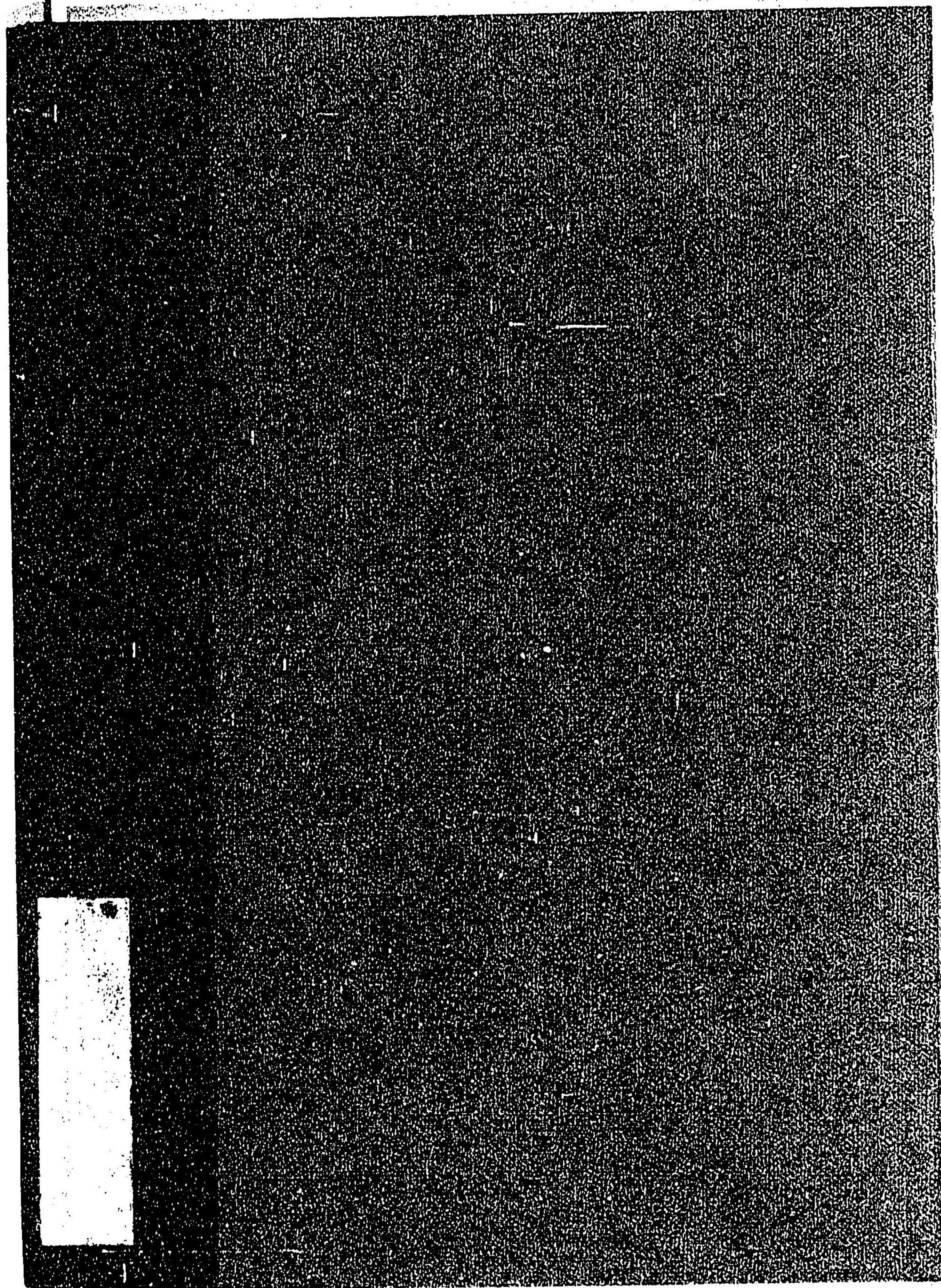
朝夕は涼敷相成候得共日中の暑は一層酷敷不堪煩悶候處益御健在に被爲渡奉賀候支那事變も鳥渡相片付きたる様には候得共實際はいろは之い位にして列國の共同は永續すへきや北京救援は列國共同の目的なりしが故に今日までは共同以て事に従ひたれども此共同は果して終局まで繼續すべきや差當り支那政府を組織して秩序を回復するが如き共に希望する所なるへけれども更に一步を進めて賠償等の問題に入れば利害感情希望を異にし列國の期する所自ら一なるを得ずして各自の運動と爲るや知るべからず列國會議に於て各國の提議を協定するは頗難事なるへし支那政府は如何なる要求に會ふも之を斥くるの力なきは勿論なれども彌々單獨運動となれば事件は一層紛糾して外交界に種々の奇觀を呈する事も可有之と被存候左れば今まではよき役者の出ざる序幕にして之より大道具の仕掛名題の顔揃ひとなる三段目の切幕に候得半中々油斷も安心も出來ざる事どもに候併し日本人は例の飽きボイ性質にて適當したる一笑話有之候左に

急鐘報災、係親戚方位、飛奔而往、路遠不勝喘汗、嘆曰、火事不如近

要するに支那事件は自今正に本題に入るべく國民の警戒注意すへき時機と相成候扱て昨一詩を得たれば斧正に供し餘は後便萬縷と申縮候勿々走筆

晚風如水雨初晴、吟骨清涼對月明、識得街頭秋信到、今霄太少賣氷聲、

K-89



特50

136

列國聯合
支那戰爭記

国立国会図書館